
宇宙孤児の秘密

冴木雅行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙孤児の秘密

【Zコード】

N1873Z

【作者名】

冴木雅行

【あらすじ】

遠い遠い未来。人類は地球から別の恒星系へと旅立ち、数世代かけて居住可能惑星にたどり着いた。しかし、そこにたどり着いたのは、宇宙で子を産み育てた「宇宙世代」ではなく、冷凍冬眠技術によって眠りにつき、自覚めた者たちだけだった。やがて近恒星間航行が可能となり、惑星連盟という緩やかな共同体が成立しても、宇宙空間で子孫が生き残れなかつたという惑星移住世代の心の傷は深く、宇宙で子をなすことはタブーだった。商船団が恒星系間を行き交い、内乱や戦争が宇宙空間で行われるようになつたころようや

く時代は変わり始めた。宇宙での出産が相次いだ。地上の人は宇宙で一生を終えることはできない。たとえ、宇宙空間で子をなしても、心身の限界により、親は地上に帰らなければならない。宇宙空間で生まれた子が地上で生きられる技術もなかつた。このような不運な子らは「宇宙孤児」と称された。これは、「宇宙孤児」の誕生からさらに数百年未来のお話。第2章スタートしました。

1・いつの間にか僕は最も静かな戦場で思った。

宇宙空間での戦闘は、静寂に包まれていると何かで読んだ記憶がある。確かに、味方の艦隊が巨大な出力の光学兵器を連射していても、敵の攻撃で破壊され、撃沈されても、艦橋は無音だった。

そう、僕は戦場にいる。宇宙軍の軽戦闘艦の臨時オペレーターとして。

本来、オペレーターの役割は、情報処理だ。艦内外の情報を把握して報告する。いくらAIによる情報処理が主流になつていては言え、人の目での確認、判断を不要としないのが軍隊である。とはいっても、僕のやることは限られていた。自分で「育てた」ナルAI（PAI）がほとんどの処理をしているからだ。僕は、必要な情報を解釈し、伝えるだけだ。

僕はパートナーであるPAIを「ミミ」と呼んでいる。名前は愛着を誘う。そもそもPAIのカスタマイズ自体は、程度の差こそあれ、誰でもやっている。ホログラミング・フィギュアを好みの異性（まれに同性の人もいるが）にしたりするのは、一般人でもやつていることだ。着せ替え人形のようにしたり、変な語尾を付けさせれば、見事「ヘンタイ」という侮蔑の称号を与えられる（なぜ、ヘンタイと呼称されるのかはよく知らないが、響きは侮蔑に向いている）。でも、僕のように、プログラミングから手を入れ、「育てる」のは、気が触れたマニアとしか言ひようがない。言い訳はしない。反省もしない。

僕は、惑星連盟軍宇宙大学校工廠科に所属しているが、ここの中学生にもヘンタイは多くてもマニアは少ないらしい。ところでも僕は

出会ったことがない。一度、僕が、P A Iのプログラミング構造について、P A Iに詳しそうな同期に話をふったとき、全く話が噛み合わなかつた。

僕が軍の大学に入つたのは、宇宙孤児という不運な身の上だつただけではなく、A I研究のためだつた。5年間従軍すれば、違約金も発生しない。軍の研究職にだつて就けるかもしれない。そんな淡い期待を持つて入学した。でも、入学してからそうそう経たないうちに、僕のそんな淡い期待は、甘い夢だつたと思い知らされた。軍隊というのは、金に糸目を付けないものだ。しかし、それは利用可能な性の高いものという限定つきなのだ。

A Iは、軍において実用化されて久しく、デバックの必要すらないほどシステム的に安定している。A Iの構造を抜本的に見直すことは、コストパフォーマンスが悪すぎる

これを僕は、ゼミでも、配属志望聴取時でも、個人研究授業でも、さらには立ち話でも、少将待遇の学科長から軍のカウンセラーまで色んな人から何度も言われた。「固定観念を打ち破らないところに科学の発展はない」が口癖の老教授までもが同じことを言つたのだ。

こうして僕は、自分の研究計画が軍では受け入れられないことを悟り、しばらくの間、A I研究を個人的な趣味に止めておくことにした。さつさと従軍義務を終えて、貯まつた給料でどこかの大学の工科研究科に行こうと決心し、学業を淡々とこなし、寮ではミニミニを「育てる」日々を過ごしていた。

… あの人には目をつけられるまでは。

1. ニュージーランドのだいひん業は最も静かな戦場で思った。（後書き）

昔の話を聴んでいただきありがとうございました。

2・幼女と巨乳美女（ただし、声のみ）

『負け戦ですね』

『ミミが僕に語りかける。脳内で。10歳くらいの女の子の声。

僕はP.A.I.のマニアかもしだれないが、別に精神は病んでいない。ミミの発話は、耳に取り付けた疎通器具スルコンニケーターによるものだ。P.A.I.と脳との間で相互に電気信号を伝えることができる。歴史的にはバーチャルリアリティの発達に合わせて、このような脳電磁器具も開発されてきた。軍でも「訓練」や「尋問」にバーチャルリアリティが活用されているらしい。あと僕はロリコンでも、ペドフリリアでもない。ミミの成長を人間の成長に合わせているだけである。何て言つか、育てる実感が湧くじゃないか。

『その通りだね、ミミ。でも、僕らの任務は終わってないし、僕はまだ死にたくないなあ』

僕は、心の中で話す。

『んーと、じゃあ、戦術目標の第一順位をマスターの生存、第二順位を任務の遂行に切り替えますか？』

『ちょっと待って、ミミ。第一順位は、僕と同僚と船団の人たちの生存にして』

『はい。マスター！』

元気の良い声。素直な娘に育つてくれているようだ。

『じゃあ、頼むよ』

この会話は時間にすれば一瞬、1秒にも満たない。実際には電気信号のやり取りなのだから当然といえば当然である。これが、僕が組んだP.A.I. の一形態だ。

「負け戦ね」

ミミとの対話が終わるや、それを見計らつたように僕を戦場に連れてきた張本人の声がする。音声のみのプライベート通信。何で任務中に艦長がプライベート通信をするのかと至極真っ当な怒りを覚える。

マリー・ベル・フォーゲルト、惑星連盟軍宇宙大学校戦術研究科4年の先輩。通称マリア。金髪碧眼の超絶美人、成績良し、スタイル良し、家柄良しとの評判である。ただ、性格がひん曲がりすぎて、一回転しているからまっすぐに見えるというこの世の不思議を、僕はこの人に垣間見る。本人には言わないが。

「ええ。護衛艦隊の損傷率は2割をまもなく越えるでしょう。一方で敵艦隊にはほとんど損傷を『えられていません。戦意も高いと思われます』

意趣返しのつもりで、艦長席の仮想ディスプレイに映つているであります当たり前の情報を報告する。敵は、艦隊という名に恥じない陣容である。今は、攻撃が少し薄くなっているが、紡錘陣に組み替えるつもりだろう。攻撃しながら陣形を組み替えるのは相当の練度が必要なはずだ。下手にやると、味方を攻撃しかねない。

「・・・『宇宙海賊』なんてネーミングは間違いね。今の宇宙軍の精銳だって、かの有名なクラフト中将の艦隊でもこれほどの動きはできないわ」

僕の答えが気に入らなかつたのか、少しムッとした様子でマリアは言つ。

確かに、マリアの言つとおりだらう。『宇宙海賊』は惑星連盟による呼称に過ぎない。商船団や輸送船など民間の船がこの宙域で行方不明になる事件が頻発したので、マスコミがそう呼び始め、惑星連盟も追従的にそのように呼称するようになつただけだ。僕らは、とこづか、惑星連盟そのものが、敵を見誤っていたのだ。

僕は、マリアにそそのかされて彼女の任官前実地訓練のサポート要員としてこの戦場にいる。そもそも、実地訓練というのは、戦闘地域や危険海域に赴きははするが、そこの中難易度の任務を行うものである。マリアのチームが引き受けたのは、この宇宙海賊の跋扈する航路を通行する商船団を護衛するという任務である。正直、商船団もわざわざこんな海域を通らなくてもと思つ。ただ、護衛艦隊が商船団を護衛するので、マリアのチームがやるのは、苦情聞き、医療提供などのほかは護衛艦隊との連絡調整役で、事務作業効率と精神力が試される任務のはずだった。

僕は抜き差しならぬ理由で断り切れず、「まあ、簡単な任務だし、私がいるからチョロいものよ」とのマリアの言葉を少しばし信じてついてきたのだ。そして、ふたを開けてみれば、僕たちが停泊した補給基地をあんな練度の高い1個艦隊に急襲されたのである。そして、その報告をした僕に見せたマリアの態度は、一生忘れないと思つ。マリアは「やっぱり来たわね」と満面の笑みで言つたのである。

「どうすればいいと思つ?」

表情は見えないが、ニヤニヤ笑つている姿が容易に想像できた。

「艦長、私にどうすればいいかを語る資格はありません。軽戦闘艦の技術士官扱いですので。その相談は、まずは副長に、その上で教育官にすべきでしょ?」

僕は、あくまで任務中の態度を崩さない。崩してたまるか。

「もう、意地悪しないでよ。プライベート通信なんだから、マリアつて呼びなさいよ」

甘えた声を出すマリア。意地が悪いのはあんただと言いたいのをからつじて我慢した。僕の堪忍袋は大きい。自分を褒めてあげたい。

「艦長、そもそも任務中にプライベート通信は、今回の契約書がここにあるんだけど、わすれちゃった?」「

僕は、マリアに付きまとわれるよくなつてから、数々の恥辱を受けてきた。今回、マリアのサポート要員としてついてきたのは、ついてくれば、単位認定があるなどという自分の利益を考えたのではなく、その恥辱の瞬間をカメラに収めたものを、全星系ネットワークの番組に投稿するとの脅迫に面したことによる。そして、交わした契約書には、マリアの部下として振舞うといつ条項があった。任務なので、当然だが、マリアは部下を下僕と勘違いしているのではないかと、こうくらい、ことあるごとに僕を頻繁に呼びつけていた。何というひどい話だらう。

「…………分かりました」

僕は、ため息を一つついて無駄な抵抗をあきらめることにした。

2 幼女と巨乳美女（ただし、声のみ）（後編）

昔の話を聴んでいたときありがとうございました。

3・こいつの所為だと思ったのは、抜き差しならぬ事態になつてからだつた。

戦いは一方的な展開になつていた。

敵は、そもそも護衛艦隊の2倍以上、陣容も我が軍で言つところの重量級戦艦5隻、巡洋戦艦20隻、軽量級戦艦に至つては100隻を越える。主力は、軽量巡洋艦であるが、惑星連盟宇宙軍が5000隻を1個艦隊として数えているやり方で言えば、総数は半個艦隊ほどもいる。一方、我が護衛艦隊の陣容は、その半分に満たない。しかし、重量級戦艦1隻、巡洋戦艦5隻、軽量級戦艦50隻、軽量巡洋艦が1000隻弱というのは、護衛としては、十分すぎる。これまでの宇宙海賊の戦力規模を考えれば、襲撃自体があり得なかつた。

護衛艦隊は、カイル・フォーツバニア少将が率いている。惑星出身組の将官は珍しくないが、一般兵からの叩き上げという点では極めて珍しい。敵の急襲と圧倒的な攻勢という混乱極まる自体の中で、戦線を維持しているだけでもフォーツバニア少将の能力の高さが分かる。しかし、それも敵が次の攻勢をかければ味方の戦線は一気に崩壊するだろうと他人事のように僕は思った。

僕が戦況を他人事のように考えざるを得なかつたのは、我が艦がすでに護衛艦隊の後方から商船団を率いて離脱しているからである。敵部隊の急襲という事態を受け、臨時教官であるフォーツバニア少将から、実地訓練の任務の変更が申し渡された。護衛艦隊は、軽戦闘艦が1隻いても戦況に全く影響はないし、ましてや任官前のヒヨッ子准尉では話にならないのだろう。表向き、性格のねじれを隠しているマリアは、少将の指示に迅速に対応し、商船団を率いて戦場を離脱した。その手並みは、とてもヒヨッ子准尉のそれではなか

つた。マリア本人がヒヨッ子ではない自負がありながら邪険に扱われたことや戦術研究科生としていわゆる弾丸（実際には光学兵器であるが）飛び交う戦場を離脱させられたことに対しても思わないわけがなかった。それ故の「どうするべきか」との質問なのだろう。

「どうすべきかと聞かれましても、我々の前方にいると思われる伏兵を何とかして、商船団を安全海域まで送り届けるしかないと思いますが。」

僕は、そっけなく意見を述べる。

「あら、伏兵なんてどうして分かるの？」

マリアは、さも驚いたかのように聞く。僕は、マリアが後ろの艦長席でニヤニヤと嫌な笑みを浮かべていると確信した。

「敵はあれだけの大艦隊を用意して奇襲したんです。用意周到にもほどがあります。そうすれば商船団を戦線から離脱させない策が決してしかるべきです。でも、僕らは戦線を離脱できた。敵がどんでもないうつかり屋さんが、わざと離脱させたかと考えるのが普通です。おそらく商船団を無傷で捕らえることが目的と思われます。」

「そうね。それで、伏兵を何とかするってどうするの？ 戦術シミュレーションで私が唯一勝てなかつたあなたの策が聞きたいわ。」

マリアは、甘く挑発するように言った。台詞が違えば、誘惑されていると勘違いしそうな声である。

「策といつても大した……」

と良いかけた僕の脳内に女の子の声が響く。

『マスター、『レーテレ』してみる』

なぜか拗ねたような声でミミが言つ。

『ミミの勘違いだよ。報告かい？』

電気パルスを読み取れるミミが勘違いする訳はないのだが、思わずそう言った。

『うん。この先の待ち伏せできるところと待ち伏せの人数とどうしたらいいかを調べて5つくらい作戦を立てたよ』

『ありがとう。早いね。さすがだね』

『うん。マスターのためだもん。あと、さつきの悪い人たちの動きも調べたよ。』

『良い子だね、ミミは。』

『うふふ、私マスターだい、『ビー！』』

ミミヒー瞬のやり取りをしていると、仮想ディスプレイに艦長から緊急呼出しがかかる。

思わず艦長席を振り返ると、マリアが獰猛な肉食獣が獲物を見つけたときの笑みを思わせる表情で手招きしていた。僕は、急いでオペレーターの任務をミミヒーに任せるよう設定し、艦長席に向かった。僕は全身にびっしょり冷や汗をかいていた。

3・この所為だと想つたのは、抜き差しなりぬ事態になつてからだつた。

拙こね話を聴んでいただきありがとうござつた。

4・養母の教えは正しかった。

僕は、心中で「『』に頼むよ」と言い、艦橋の1段上にある艦長席に向かった。それにして、マリアが「『』との会話に気づくはずはないのに不思議なことだと思ひ。そういうえば、僕はマリアが変に鋭かったことを思い出した。

工廠科出身者でも、士官である限り前線に立つことはある。宇宙大학교の基本単位を取らせるための建前だけではなく現実にあるのだ。だから、基本訓練及び戦闘実習は工廠生でも単位取得基準が厳しい。無料で大学に通わせてもらっているのだから義務はあって当然だと思ひ。

戦闘実習の中に戦術シミュレーションという授業がある。ゲーム好きも多い工廠生にとつては比較的ありがたい授業である。マリアを初めて認識したのは、その授業だった。この科目の単位取認定テストは、教官の代わりに戦術科の先輩が敵役をする。教官としては、戦術研究科生の適性を見る機会でもあり、だいたい後輩はコテンパにやられる。これが工廠科生の通る道だった。僕たちの学年もその例に漏れず、成績優秀者でさえ、完膚なきまでに叩き伏せられてしまい、時間切れの引き分けさえ、まれだった。

テストでは、当然ながら成績優秀者同士を当てるものである。可もなく不可もない戦績の僕は、同じくらいの成績の先輩と戦う予定であり、僕は負けるまでの時間をいかに引き伸ばそうかと考えていた。しかし、なぜか僕の対戦相手はマリアだった。あとで聞いた話だが、マリアの戦績は無敗。ぶつちぎりの成績優秀者だったらしい。

教官は、たいそう氣の毒そうに「瞬時に負けても単位はやるから。」と僕に告げた。僕はあまり気にするでもなく、「はあ、ありがとうございます」と表向きのお礼を述べた。でも、質問は決してすべきではなかつたのだ。好奇心は猫をも殺すと養母が常々言つていたじゃないか。

「でも、どうしてですか？」

士官を目指すものにとつて理由を問うてはならないということを僕は分かつていなかつた。教官は畳然とした様子で僕を見ていた。教官がなんと説明しようかと迷うかぶりでいると、僕の対戦相手が声を上げた。

「私のことをまさか知らないなんて言わないでしょ？」

自信に満ちた立ち居振舞い。スタイルの良さはトップモデル並みなんだろうと思つた。

「私は工廠科なもので。申し訳ありませんが、存じ上げません。お名前を教えていただけますか？」

僕は、本当に知らなかつたのだ。それがたぶんマリアの氣にくわなかつのだと思つ。

「あんた・・・いい度胸ね。」

この先輩の名前を聞くのに手續が要るはずはない。何がこの人を不機嫌にさせたのか。なるほど、人の名前を聞くときは、まず自分から名乗るべきと言いたいらしい。

「これは失礼しました。私は、工廠科2年のショーン・ヒルガと申します。」

「そんなことは知つてゐるわよーーーたく、戦術科3年のマリーベル・フォーゲルトよ。」

どうやら、選択肢を間違えたようだ。女性はよく分からぬ。でも、その名字には覚えがあつた。

「フォーゲルト先輩？・・・あ、突撃と速攻が得意な人でしたっけ。

「

「そ、そうよ。」

ちよつとびっくりしたのだろうか、名前を知られていなかつた怒りが続いているのかちよつと顔が赤い。

「それは、失礼しました。先輩の突撃、速攻の見事さにアーカイブをいくつかほぞん、いや見たことがあつたんです。でも、お会いしたのは初めてですね？」

「ほ、誉めても無駄よ。でも、ま、まあ私のアーカイブを見るなんて見所あるわね。」

なんか急に見所のあるやつに昇格したらしい。

「いえ、どうしたらあの速攻を防げるかと考えていたんですけど、工廠科の僕にはさっぱり。」

お世辞のきく人だと思った僕は、さらに持ち上げようとした。

「私のアーカイブを見たなら私の実力が分かるでしょう？ 何でも言うことを聞くつて約束するなら、手を抜いてあげても良いわよ。」

言つてる意味が分からぬ。ただのテストで何で我が身の自由を賭けないといけないのか。評価不能の敗けなら追試を受ければいいのだ。しかも、瞬時に負けても単位はもらえるとお墨付きをもらつたのだ。

「せつかくの申し出ですが、遠慮しておきます。私はこの授業に人生賭けてないですから。別に手を抜いていただいても、結果に変わりないと思いますので。」

「勝負から逃げるわけね、男らしくない。」

何で挑発されているのだろう。まるで素行不良の輩に絡まれた気分がする。この手の人の行動原理は理解できない。

「勝負と仰いましたが、ご自分が相当に有利な条件のもとにいらっしゃるのですから、逃げることになんのためらいも生まれません」

「・・・じ、じゃあ、ハンディを付けてあげるわよ。構わないでしょ、か、教官？」

教官は僕の方を氣の毒そうに見て頷いた。テストとは言え、たかだか授業なのに何でこんなことになるのか。ただ、この人は、意味不

明の行動原理でどうしても僕と賭け勝負がしたいようで、断れば別の機会にまた絡まれそうな気がする。

「ハンディをもうう代わりに、負けたら僕はどうなるんです？」

「私が勝つたら、生まれてきたことを後悔するくらいに辱しめてやるわ」

僕は、助けを求めて教官を見た。教官は口をそらした。

（責任者が逃げやがった。）

たかがテストに僕の人としての権利がかかる。そんな事態になつた。口は災いの元だと養母が言つていたのを思い出した。

結局、僕が貰つたハンディは、積載物資の変更と通常よりも10分多い準備時間、そしてP A Iの使用だつた。そもそも、このテストは初めから工廠科生にハンディが与えられている。1個艦隊同士の艦隊戦なのだが、戦術科の先輩は、標準的な編成の艦隊を指揮することになる。一方、工廠科生は、編成自由、戦場の決定権もある。しかも、戦術科の先輩は勝利が必要だが、我々は艦隊として戦闘不能に追い込まれなければいいのだ。それだけのハンディがあつてもなお、工廠科生は負けてしまう。

僕が、マリアの模擬戦のアーカイブを保存（P A Iに保存する）ことは基本的にできない仕様になつてゐるが、ミミは人間と同じように「見る」ことで覚えることが可能なのだ。したのは、ミミの思考訓練のためだつた。別に戦術シミュレーションでいい得点をとろうと思つたからではない。もし、そなうなら僕はもっと良い戦績を修めていた。ミミは、戦術シミュレーションが得意、というか好きなようだつた。今では一度誰かの戦術アーカイブ見せると、僕が考えるよりも優秀な対応策が数種類返つてくる。それ故、僕にはそれなりの勝算があつた。こうして僕は、人としての尊厳の危機を回避すべく、ミミと共に望まぬ戦いに身を投じることにした。

「準備時間中、だれか女性としゃべっていなかつた？」

マリアが仮想ディスプレイ越しに聞いてきた。

「まさか。フォーゲルト先輩もそこにいらっしゃったのでしょうか？」

「・・・そうね。それよりも準備はできたのかしら？」

「ええ。戦場はアルワナ小惑星域でお願いします」

「聞いたことない場所ね：まあいいわ。それにしても、君、余裕そういう見えるわね」

「半分あきらめで、半分後悔してるんですよ。お手柔らかにお願いします」

「それはダメね。今日から君は私の奴隸になることが決まっているんだから」

僕はため息を一つつき、教官を見た。教官は頷いて開始を告げた。

「は？ 何これ？！」

マリアが変な声を出す。まあ、そうだろう。艦隊の編成があり得ないのだ。

「テー・マは宇宙海賊です」

僕は、この編成のコンセプトを告げた。

4・養母の教えは正しかった。（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

5・愛情を持つて育ててきたのに、非行に走りそつと娘を見て、僕は不謹慎に

『マリアに聞こえるはずはないのだが、僕とミミは、こんな会話を交わしていた。

『マスター、大変なことになっちゃったね。あの年増女のせいです年増つて、いつの間にそんな言葉をおぼえたの？』

娘の非行は、愛情不足が原因と言われる。僕は、さらに愛情をかけてミミを育てよう決意した。

『ミミが用意したこの作戦なら絶対に勝てるよ。』

僕の眼前に、作戦の概要が示される。僕がかけている『マルチグラス』に映っているのだ。

『ええと・・・うわあ。これは悪辣だな』

僕は、そんな感想を述べた。ミミが提案した作戦は、確かに戦術シミュレーションで負けない方法としては最適と思ったが、どう考えても正規軍がやる作戦ではなかった。

『あくらつって？』

『とても意地悪だつていうことだよ』

『意地悪しちゃダメだつた？』

『ミミは、シュンとした声を出す。

『いや、ミミは一番いい作戦を立てたんだよ。心配しないで。うん、これで行こう。そうすれば、僕は奴隸にならなくて済むし、あの先輩も面白が保たれると想つからね』

僕らの戦いを観戦しようと集まってきた人々をみれば、どうやらマリーベル・フォーゲルト先輩、通称マリアには、熱烈な支持者がいるようだ。僕が徹底的に悪役を演じれば、卑怯な手段をとられたから負けたと思ってもらえるだろつ。そうすれば、僕が勝つても、少なくともマリアの評価は下がることはない。僕への敵意や関心を減らすのは別に方法を考えればいいだろつ。

こうして僕は、「宇宙海賊」を演じることにした。

ミミが戦場に選んだアルワナ小惑星域を、マリアと同様に僕もこの時まで知らなかつた。不思議なことに、ミミには、膨大な数の恒星系の地理データが、最初から頭に入つてゐる様子なのだ。僕が教えた知識でなく、ミミが自分で学習したデータベースでもない（そもそも、恒星系の地理データは一部しか公開されていない。）ので、そう考へるしかなかつた。ミミを公にできないのは、僕にヘンタイだとから口リコンだとかの不名誉な評価が与えられる恐れだけではなく、僕にもよくわかつていらない秘密がミミにありそつだからなのだ。

アルワナ小惑星域は、恒星アルワナを中心とした星系にある。恒星アルワナは老年期終盤を迎へ弱い光を放つてゐる。かつて周囲を公転していた惑星の大小さまざまな残骸が、帯状に広がり今なお主星の周りを公転し続けてゐる。恒星アルワナと小惑星域の間に布陣すれば、外部からの侵入経路が限られる。小惑星域はその帯の外に向かうほど残骸の密度は薄く、中心に行くほど密度は濃い。最も密度の濃い中心部ですら相当広く、ここを回避してこちらまでたどり着くのには、ゲーム内時間で1日かかり、それだけで時間制限に引っかかる。それゆえ、敵艦隊が攻めてくるとすれば、残骸の隙間を縫う狭い天然のトンネルをくぐつてくるしかない。突撃と速攻を得意とする敵艦隊にとつては、厄介な布陣となるはずだ。

マリアが驚いたのは、僕の艦隊の編成である。通常、1個艦隊の編成においては、軽量級から重量級の巡洋艦が主力となる。そして、分艦隊指揮に巡洋戦艦を割り当て、部隊指揮に軽量級戦艦を割り当てる。あとは、火力と機動力のバランスによつて、重量級戦艦の割り当てを決めるのである。僕は、巡洋艦の編成を全く変えた。通常、2500隻ほど割り当てる軽量巡洋艦を外して、工作艦と輸送艦に

割り当てたのだ。工作艦は、機雷敷設、惑星降下など特殊作戦用の艦であり、輸送艦は、非戦闘要員や物資を輸送するための光学兵器を搭載していない艦である。火力を考えれば、僕は勝利など絶対に望めないはずと考えるだろ。」

開始直前30秒間、相手の艦隊編成が見れる仕様になつていて。マリアは不審に思つたはずだが、歴戦の猛者であつても、30秒間考えたところで、艦隊編成のみでこちらの作戦を読むことはできないだろう。マリアは、眉根を寄せて考えている様子だった。やがて、開戦の合図が出され、僕の人としての尊厳がかかつた戦いが開始された。明らかにけんかをふつかけられた側の僕が悪役を演じざるをないところが釈然としなかつたが、これしか方法がなかつた。

開戦の合図を聞くやいなや、マリアは、艦隊を密度の薄い方形陣から、素早く陣形を再編し始めた。それはそれは、見事な艦隊運動だつた。ゲーム内時間で1時間ほどで、横につぶれた半球陣に再編成をしたのだ。

『さすが、戦術研究科生の中でトップスピードを誇るだけのことはあるね。じゃあ、ミミ』

『小惑星帯のどの部分に砲火が集中するかを計算するんだよね?』
『そのとおりだ。僕の指示がなくてもミミはひとりでできそうだね』
『嫌!マスターがおしゃべりしてくれないと嫌だもん。・・・計算完了したよ。』

かわいい。報告が丁寧語じゃなくなつていてるのが特に。娘にメロメロな父親はこんな感じだろうか。

『じゃあ、次はアレを動かそう』
『はい、マスター』

マリア艦隊が動く。速攻である。砲火を集中させるのに最も効果的な場所に最大戦速で移動する。

「撃て！」

マリアは、艦隊指揮官よろしく、号令をかける。

光学兵器は、実際の戦場では目に見えないらしいが、戦術シミュレーションは便宜上光の筋が描かれる。半球陣から一斉に放たれた光の筋が束になり、小惑星帯の1点に集中する。小惑星帯に穴が開く。

「第一射、撃て！」

早い。おそらく普通の人は、照準を定め直すのに時間を要するだろう。それをしないということは、マリアが何手先もの指示を考えてこるということだ。

再度、半球陣から光の束がさつきよりも奥をめがけて放たれる。時間制限がある中では、この戦術しかないのだ。しかし、マリアは無駄がなく、早い。たくさんの小惑星を吹き飛ばし、トンネルを穿つ。

「ビーー・ビーー・マリア・フォーゲルト、ペナルティです。5分間行動不能になります。」

機械的な音声が響いた

「え？！・・・何？非戦闘艦の撃沈？どういふことー？」

マリアは叫ぶ。僕は、混乱しても気品のある人はいるんだなあとほんやりそんな事を思った。

「僕の艦隊の輸送艦が、先輩の艦隊の射程距離内で白旗を上げて、救難信号を発していたはずです。」

「そんなバカなことつてある？ 教官、ルール違反ではなくて？」

教官に対して堂々たる態度のマリア。

「いや、ルールはある。艦隊戦シミュレーションでは使わないが。そもそもルールにないことはできないようになつているはずですよ、先輩。」

「く！」

5分のペナルティ、ゲーム時間内では2時間余り浪費することになる。残りは20時間弱となる。

『どうやら、同じことを恐れて速攻と突撃はあきらめてくれそうだね。』

『あの狭いトンネルを通つてもらわないと、いけないですもんね、マスター』

『そうだね。じゃあ、白旗と救難信号は相手の射程内に入つたら出すように設定して。』

『もうやつておいたよ。次のも用意する？ マスター』

『そうだね。時間を見計らつてやつてくれる？』

『はい、マスター！』

5分のペナルティを終え、艦隊を再編する。予想通り、縦列陣を組み、小惑星帯のトンネルを抜ける作戦に切り替えたようだ。しかし、早い。予想よりもはるかに速い。チラシとマリアに田をやると、異常な集中力でキーを叩いていた。

1時間も経たないうちに、縦列陣を完成させ、小惑星帯に突入した。

本当に無駄のない陣形である。基本に忠実なだけが、少しでも前後の距離を縮めようとやや柱に近い形になるように組まれており、芸術的とすら思える。

トンネル内には、マリア艦隊が加速するタイミングを計算し、その直前に救難信号を発する輸送船団を何重にも配している。ちなみに僕は何もやっていない。///がやった計算である。

「ぐつ、悪辣ね」

マリアが思わず漏らす。

「宇宙海賊にとつてはほめ言葉です、先輩」「ぐつ、あの年増悔しがつてゐるね、マスター」

明るく、悪口を言つ//。そんな娘に育てた覚えはありません。いや、今僕は、悪役で、戦闘員を乗せた艦を盾にするなど朝飯前なのだ。///も悪役に徹しているだけだと思つ。そう思いたい。

マリア艦隊は、手際良く輸送船を救助しトンネル内を進む。それでも、これが10回を超える//、//、マリアのイライラも頂点に達していた。

『そろそろ、敵も強硬策に出るはずだ』

『うと、もうタイミングは計算して、次のもやつておきました!』

『本当にすこいね。//』

自分が育てているP.A.Iをほめたたえるなんてゆがんだナルシシズムだと自分でも思つ。でも、本当に出来がいいのだ、この娘は。

一つの場所で救助を求める輸送艦の数を、進むごとにどんどん増えるように配置している。マリアが、今出合っているのは、その場所の上から下までを埋め尽くすほどの数の輸送艦だらけ。ここで、変化が起きた。マリアが軽量巡洋艦を前に出し、輸送艦に低速で体

当たりをさせ、道を空ける作戦に切り替えたのだ。これだけ同じ策で邪魔をされると、誰でもさすがに焦る。陣形を崩しても早く進みたいとの欲望には、さすがのマリアもかなわなかつたようだ。しかし、焦りは、冷静さを失わせ、観察眼を曇らせる。

この先、輸送艦は、これまでの半分ほどの距離¹とに現れる。しかし、違ひはそれだけではない。輸送艦に物資輸送用のポッドが艦下部に結わえつけられている。また、輸送艦自体に、最低限のシステム維持用しか燃料が残されていないのも特徴である。救難信号の内容もそのことを伝える内容に変化しているのだが、マリアは気づくだろうか。

結論からいえば、氣付かなかつた様子である。軽量巡洋艦に低速で体当たりをさせ、道を空けて先を急ぐ。間隔をおかずに出てくる輸送艦、先を急ぐために、空ける道の幅は狭くなつていく。だんだん隊列が伸びていく。

『今だ！』

『はい！マスター』

僕の指示、いや、ミミの指示で、物資輸送用ポッドに取り付けられている自動エンジンが一斉に火を噴いた。一気に全力でブーストする。当然輸送艦は、それにつられて進もうとする。しかし、ポッドが結わえつけられており、姿勢制御も十分でない各輸送艦は別々の方向に進もうとする。輸送艦同士がぶつかる。全力でブーストしているエンジンに輸送艦がぶつかる。コントロールを失った輸送艦がマリア艦隊にぶつかる。狭いトンネルの中で多重事故が起きた。あちこちで爆発が起きる。マリア艦隊は、この策によつて、四分五裂に分断されてしまった。

「ビー！ビー！マリア・フォーゲルト、ペナルティです。5分間行動不能になります。」

「何でよー。」

憤怒の声を上げるマリア。

「いや、救難信号を無視した結果ですよ、先輩。輸送艦はちゃんと情報提供していたはずです。姿勢制御用の十分な燃料もないって。」

「くっ・・・」

ペナルティが終わり、トンネル内の混乱も収まるころ、マリア艦隊の実働艦数は半減していた。

気がつけば、ゲーム終了まであと5時間になっていた。

5・愛情を持って育ってきたのに、非常に走りやうな娘を見て、僕は不謹慎に

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

ゲーム内の5時間は、現実の10分強である。

あと10分間、僕の艦隊に攻撃をさせなければ僕の勝ちだ。しかし、敵は、極めて優秀な艦隊指揮をするマリアである。5時間あれば逆转も可能かもしない。

『マスター』

『///の声が脳内に響く。報告モードではない。

『どうした?』

『あの年増は、すぐに小惑星帯を抜けてくると思つた。』

『どうしてそう思うんだい?』

『計算してみたけど、今いる位置から戦略級兵器を使えば一発で抜けられるよ。』

戦略級兵器、特殊砲とも言つが、主に重量級、それも旗艦レベルの艦にしか備え付けられていないものである。威力は強大だが、エネルギーの充填効率が悪く、艦隊戦で使用することはほとんどない。充填している間に、相手が射程距離外まで逃げができるからだ。いわゆる攻城用兵器と言える。

『ああ、なるほど。マリアの旗艦は、半分よりも前にいたんだ。後方で足止めされてもおかしくないのに…何というか、戦いの勘みたいなものなのかなあ。そうだ、///。敵が小惑星帯のどの部分から抜けてくるか計算できる?』

『もうしてあるよ、マスター』

ディスプレイには、3つの選択肢が示されている。まだ動けるマリア艦隊が現在いると推定される場所から、仰角15度、俯角20度、俯角30度にまつすぐ来た地点がで示されている。最短はまつす

ぐなのががまつすぐだとまたペナルティを食らう恐れがあるので、マリアは上か下に角度をつけて撃つはずだ。そして、この3つの角度以外に向けて撃つた時には輸送艦が配置されているので、マリアの負けが確定する。

さて、ここからは確率の問題ではなく、心理学の問題である。

当然角度の浅いものが最短になるので、普通に考えれば上に来る。ただ、これまでのマリアが通つてきたトンネルは、左右に振られるものの緩やかな登りになつてゐる。レーダーでトンネルの構造が確認できないので、これまで通つてきた道を頼りに予測するしかない。とすれば、マリアの立場に立てば、少々遠回りになつても、俯角30度の出口に特殊砲を撃つのが妥当と思われた。

『僕は、一番下から来るとと思ひけど、////せどひつて？』

『//は、一番上から来るとと思ひ。』

『どうして、そう思うの？』

『うーん、わからんけど、あの年増はそうする気がする』

『・・・//が、気がするつて言ひのは、初めてだね。』

『うん。人が選択する確率からいえば、一番下だと思うんだけど、これまであの年増のアーカイブを見ていてそんな気がするの。なんかうまく説明できなくてごめんなさい、マスター』

P.A.Iが勘に頼るのは正直びっくりしたが、自分の常識に従うか、戦術アーカイブを詳細に記憶し、分析している//に従うか。結局、僕は//に運命を委ねてみることにした。自分は戦術のプロではないのだ。それに、失敗しても次善策はある。

『じゃあ、本隊を4つの分艦隊に分けて、一番上の出口にちょうど火力が集中するように配置。あと、工作艦を縦陣にして、本隊と一番下の出口の間、小惑星帯から30光秒の位置に移動』

『はい！マスター！』

この会話の後すぐに、一番下の出口から高出力のエネルギー波が噴き出た。しかし、最大戦速で殺到してくるはずの艦隊がやつてこない。僕は待つ。でも来ない。有利なはずの僕が、追い込まれているような気分になる。艦隊を動かしたくなつた。

『マスター。下の出口は、あの作戦で防げるよ。大丈夫だよ』
ミミの声。これがなければ、僕は艦隊を動かしていたと思う。少し冷静さを取り戻した僕は、時間を無駄にはできないはずのマリアが焦らしているのだ。何か策があるのだろうと思い、待つことにした。そして、ようやく艦隊らしき集団が下の出口に姿を現わした。その時、一番上の出口からエネルギー波が噴き出たのだ。僕が工作艦と本隊を分けていなければ、おそらく後背を突かれ危機に瀕していただろう。ミミと意見が食い違つていなかつたら、その瞬間に負けが決定していたのだ。

下の出口から出てきた艦隊は機動力重視の部隊編成だつた。こちら側の空間に出るや、上の出口にいる我が本隊に向かつて、楔形陣を組みながら突撃してくる。反応が早い。

『ミミ、工作艦に号令を。下の艦隊をよく狙つて。』
『はい、マスター』

ミミの指示で、工作艦が一斉に最大速度で小惑星帯に向かつて前進を開始する。工作艦はそれぞれ大きな惑星の残骸を曳航していた。工作艦が加速する。工作艦は敵地近辺での任務を帯びることがある。それゆえ、加速と小回りの利きは艦隊一である。

『今だ！切り離せ』

最大速度に至つた瞬間に、曳航していた惑星の残骸を切り離す。惑星の残骸は慣性の法則に従つて、亜光速で飛んでいく。下の出口から出てきたマリア艦隊の横つ腹に向かつて。1500もの工作艦が

一斉に大きな質量の物体を放ったのだ。密集隊形を取りつつあった分艦隊は、側面からの攻撃をよけきれなかつた。装甲の薄い巡洋艦はひとたまりもなく、吹っ飛ばされる。吹っ飛ばされた巡洋艦がほかの巡洋艦を巻き込んで、小惑星帯に衝突する。爆発が起き、爆風で制御を失つた艦に別の巡洋艦が突つ込む。この攻撃は、連鎖的な事故を生み、分艦隊はそれに飲み込まれる形で行動不能に追い込まれた。

ちょうどそのとき、火力重視の艦隊が上の出口に殺到した。まさに間一髪である。

「撃て！」

僕が、艦隊指揮官のような号令をかけるとは思つてもみなかつた。勢いで言つてしまつた。

ミミが計算した通り、上の出口がくじゅくクロス・ファイヤー・ポイントに当たり、集中した火力が、戦艦の厚い装甲を撃ち抜く。しかし、マリア艦隊は退かない。味方の屍を乗り越えて、果敢にも死地を切り開こうとする。こちらも気を抜けない。

現実の時間で、ゲーム終了まであと1分となつた。

そのとき、下の出口からマリア艦隊の旗艦が出てきたのだ。戦略級兵器のエネルギー充填を終えた状態で。主砲がこちらを向いた。

「撃て！」

マリアが号令をかけた直後、時間切れ終了の合図が出された。

僕は間一髪で勝者になつた。しかし、ゲームでなければ死んでいたのはこっちだらう。

そして、この瞬間から、僕はマリアにつきまとわれる破灭になつた

のだ。試合に勝つて、勝負に負けるとま、また元氣ひこりとを言
うのだろうか。

僕は、マリアとの因縁を思い出し、深いため息を一つついた。

6・勝者と敗者は紙一重（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

7・論理的帰結では、戦場で生き残ることはできない。

「艦長、ショーン・ヒルガ上級技術軍曹、出頭いたしました」

僕は、駆け出し士官丸出しの敬礼をする。マリアも敬礼で応えるが、どうも僕のそれとは似て非なる慣れた所作だと思う。

「ご苦労さま。ブリーフィングを始めるわ。そこに掛けて」

椅子が競り上がる。テーブルをはさんで僕の向かい側には、副長と砲術長が座っている。どちらも戦術研究科生の先輩で、マリアが率いるチームのメンバーである。年上に囲まれ、まじまじと見られると居心地がよくない。しかも、副長であるカール・スワミノフ先輩は、僕がここにいるのがどうしても納得できないらしく、忌々しそうな表情で僕を睨んでいた。イケメンに睨まれてもうれしくないなあと思つてその左に座る砲術長を見る。砲術長は、ウェーブのかかった黒髪が特徴的で、たおやかな笑みを浮かべている女性だ。名前は確か、ベルタ・アダルベルト先輩だつたはずだ。この微笑みに魅了される男性は多いのだろう。しかし、僕は、彼女が見た目通りではないことを知つている。何せマリアと行動をともにしているのだ。推して知るべしということだ。カールのことを「雰囲気だけのキモいナルリスト」だの、「出身惑星の重力が重すぎて、背丈も××も極小」だの、同じ男性として聞くに堪えない悪口を微笑みながら言つていた。そして、そこにカールが現れても悪口を続けるような人だ。僕だって、知らないところでなんて言われているか分からぬ。

「艦長、我々は3人チームで、彼はあくまでサポート要員です。決定のみ伝えればそれで足りるのではないか?」

カールがマリアに言つ。マリアは、それに答えず、笑みを浮かべて

僕を見る。

「艦長、スマミノフ副長のおつしやる通りです。先輩方の訓練ですし、私は控えていた方が宜しいかと思いますが」

僕は、仕方なしにカールの提案を後押しする。そもそも訓練の当事者扱いされるのは遠慮したいし、マリアが提案することにうぐくなことはない。君子危うきに近づかずと養母も言っていた。

「まあまあ、この艦に人間は4人しかいないですし、彼を邪魔者扱いするのはいけませんわ。」

ベルタが逆のことを言う。それは、要らないフォローです、先輩。「俺は、邪魔者扱いなどしていない。実地訓練のことを考えて提案しただけだ」

「まあ、そうでしたの？艦長をスト キングしたり、舐めるように艦長の足やら腰やら胸やら見ることもあなたの実地訓練ですね」詩を読むのに適した美しい声なのに、内容はひどい悪口だ。

「な！」

カールは赤く固まる。先輩、安い挑発に乗らないで下さいよって、反論しねえのかよこの人。「ぐぬぬ…」じやねえよ。

「…まあ、私が必要と思ったので呼んだまでだ。さて、ショーン、現状の報告をしてくれる？」

「分かりました。さて、目的地ですが

コンソールを叩くと、各自の前に仮想ディスプレイが現れる。

「この先、商船団を保護できる安全海域と言えば、トラディカ星系のみです。燃料の関係で超光速航行は1回しかできないからです。少なくとも追手は来ていませんが、時間がかかれば追手が来ると考えて間違いないと思います」

「おい、我が軍は、カイル少将は、簡単には負けないぞ」

「ええ、副長のおつしやるとおりです。カイル少将は歴戦の名将ですし、簡単に負けないと私は思います。ただ、あれだけの兵力差です。我々を遠くまで逃がしたうえで、離脱を図るのではないでしょか」

「ふん… 宇宙孤児の機械屋に何が分かる」

できる限り刺激しないようにしてゐるつもりなのだが、何を言つてもダメらしい。背丈も心も小さい人だと思う。

「背丈も心も小さい人は放つておくとして、私もカイル少将が逃げるとは思わないけど」

ベルタがカールの悪口を言いながら、質問する。僕はマリアを見る。マリアが僕に先を促した。

「ええ、確かに。おっしゃることは分かります。しかし、そもそも私たちが今、率いていている商船団をカイル少将のような名将が1000隻余りの艦隊を連れて護衛すること 자체がおかしいとは思いませんか？」

「宇宙海賊対策にきまつてゐるじゃないか。貴様はバカか」

「そうなんです。副長の言うとおり、『宇宙海賊対策』です」

「なるほどね。分かったわ。それならカイル少将たちは、頃合いを見て離脱するわね」

うなずくベルタ。マリアもうなずいている。カールは、彼女らを見て焦り、自分も分かつたようにうなずく。

つまりは、護衛艦隊というよりは、敵状視察がカイル少将の主な任務なのだろう。ある程度戦つて、戦力や艦隊編成などの情報を持ち帰るのが主たる目的とすれば、頃合いを見て離脱するはずである。

「話を戻します。できる限り最短でトライディ力星系にたどり着くためには、我々が今入りかけているメディニ力星系を抜けてから、超光速航行を行うことになります。」

「すぐに超光速航行に入つてはダメなのかしら。」

ベルタが聞く。

「それは、技術的な側面から推奨しません。恒星系内は、重力場が安定していないので超光速航行のリスクが格段に上がります。今回は民間船を率いていますので、リスクは避けるべきかと思います。」

「で、メディニ力星系を抜けるルートは限られていて、そこに伏兵がいる。というわけね、ショーン」

「はい。艦長のおっしゃる通りです」

「伏兵？！か、艦長、どうしてそんなことが分かるんです？」

「脳みそまで小さいなんて、神様はなんて不公平なんでしょう？」

ベルタ先輩は、たぶんどうなのだ。

「うるさい……そこの宇宙孤児、貴様も分かつてないだろ？」

「私は、ショーンからさつきプライベート通信で教わったのよ」

「な！……貴様、任務中に艦長とプライベート通信なんかしやがって、帰還したら報告してやる」

「私、見てたけど、マリアからかけてたわよ。報告するとマリアが訓告をくらうと思うけど」

「ぐぬぬ……」

カール先輩しつかりしてぐださい。本当に「ぐぬぬ……」じゃねえよ。成績はいいはずなんだけどな、この人。

マリアが指摘したとおり、メティニ力星系を抜けるルートは限られている。それは、補給基地を襲われたため、エネルギーの補給が十分にできなかつたことが原因である。我々は最短ルートで進まなければ星系を抜けられないのだ。そして、その最短ルートには、伏兵をひそめるには絶好の小惑星帯を抜けなければならない。八方ふさがり。負けが決定しているようなものだ。敵ながらあつ晴れだなあと僕は思う。

「で、問題は対策ね。副長、今ショーンから状況とルートについて説明を受けたけど、対策はある？」

マリアは、カールに話を振る。

「……小惑星帯を突つ切るルートは狭いですがトンネルというわけではなさそうですし、曲がりくねつているわけでもないようです。なので、伏兵がいると分かつていても、最大速度で一気に突つ切るしかないと思います。幸い、この艦も商船団もアシは早いですでので」

カールの対策はスタンダードであり、悪くない。欠点は、論理的に考えて誰もが行きつく結論であることだ。敵はここまで戦略的に追い詰めてきているのだ。僕らが生き残るためには、誰もが行きつく結論にひとひねり加えて、敵の裏をかくことが必要なだと僕は思う。

「ショーン、あなたの対策は？」

「基本的に、副長の作戦しかないと私は思います」

カールは、少し安堵の表情を浮かべる。

「基本的にこういうことは、例外があるのかしら？」

ベルタが聞く。

「もちろん、基本以外の作戦はあると思います。たとえば、できる限りち密な計算をして星系内で超光速航行をするとか、漂流覚悟で遠回りするとか。でも、その場合、一か八かの賭けになると思いますので、推奨しません。私が考えるのは、副長の示された基本策に一工夫をするということです。」

カールが何か言いたい様子だったが、マリアが目で制する。僕は、作戦の基本概要を説明した。

「さすが、悪辣な宇宙海賊を演じてマリアを追い詰めただけはありますわね」

「やめてください、ベルタ先輩。あまり思い出したくない過去なんですから」

僕がマリアに目をつけられ、こつして戦場まで出てくる破田になつたきつかけなのだ。あのテストを休んでいれば、僕は平穀無事な生活を送つていられたのだ。

「ショーンの言った作戦で行くことにするわ。それと、副長に商船団の船長たちへの作戦説明及び商船団の旗艦操船補助を命じます。」

「わ、私がですか？！」

「そうよ。あなたは、操船が得意だったでしょ。この作戦は、商船団が無事あの小惑星帯を抜けないといけない。操船次第で、作戦の成否が決まる。あなたの力にかかっていると言つても過言ではないわ」

「は、はい！謹んで拝命します」

カールは意気揚々と連絡艇に向かつていった。

安い男だとベルタが声を出さずにつぶやいていた。

マリアは単にカールに面倒事を押しつけたに違いないと僕は思つた。商船団の操舵手これくらいの操舵はお手のものだらうし、歴戦の船乗りの中に飛び込んで、彼にできることほんんどないと思えたからだ。

「これくらいの作戦は、マリア先輩なら考えついていたはずですが」「ええ。でも、ショーンに負ける前なら思いついてなかつたわね。たぶん、カールの言った作戦でやつて、からうじてこの艦だけ生き延びる。そんな感じだつたと思うわ。」

「いやいや、それはないでしょ！」

急にマリアが自嘲的に言つて、僕は思わず否定した。それに、あのときも今回も僕とてうよりは、ミミが考えた作戦なのだ。

「あらあら。邪魔者がいなくなつた途端に、お熱いことですねえ」ベルタが言つ。ベルタが、この会話のどこにそんあ要素を見つけたのか分からぬが、明確に否定しておこひ。こんな性格がひん曲がつて1回転したような女と恋人に見られるのは御免被る。

「ベルタ先輩の邪推ですかね、それ」

マリアを見ると、なぜか不機嫌そうに目をそらされた。女性はよくわからぬと改めて思った。

7・論理的帰結では、戦場で生き残る「」ができない。 (後書き)

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。」

8・クライ・フォー・ザ・ムーン

『ボウズ、姉さん艦長はいるかい』

通信が入る。商船団のリーダーであるトマス・ニッカからである。宇宙孤児に多い、黒髪、黒目で、ガタイの良い、男くさい歴戦の船乗りといった風貌である。僕のことを「ボウズ」と呼ぶが、嫌な感じは受けない。たぶん同じ宇宙孤児としての愛称なのだと思つ。

「ニッカ船長、作戦のことで質問かな？」
マリアは、艦長然とした態度で答える。

『ああ、あんたが寄こした小っこいのじや話にならん。これまでのよう』にボウズから連絡を受けた方がまだよかつたぞ』

「それはすまない。これから私たちとあなたの方の命がかかつた作戦をやる。私たちは軍人とはいえ、まだヒヨツ子だ。自分たちだけ体よく逃げかねないと疑われてはいけないと考え、信頼の証として、副長をそちらに寄こしたのだ』

『そりやまた、立派な言い訳を用意したな、姉ちゃん。正直言つて、あの小っこいのが邪魔だつたんだろ』

『…慧眼に感服する。いや、彼は能力も悪くないし、ことさら邪魔をするわけでもない。ただ、現時点では船乗りとして欠点が多すぎるとと思う。差別意識が強いのもその一つだ』

『なるほど。そりやあ、あれかい。その辺をこつちで叩き直してやればいいのかい？』

「特別な指導までは結構だ。船乗りとして大事なものを見て学ばせてもらえればいい」

『それくらいなら、お安い』用だ。こっちも色々迷惑をかけてるが、あんたは嫌な顔一つせず対応してくれてるからな。』

「それは助かる。感謝申し上げる。』

『照れくさいから、感謝なんていらねえよ。で、ありやあ、あんたの作戦かい？』

『いや、あんたが『ボウズ』と呼んでいるショーン・ヒルガ上級技術軍曹が立てたものだ』

『ほう。じゃあ、ボウズに聞くとするか』

僕は、改めて作戦の概要を説明する。

『なるほど。じゃあ、伏兵は、俺たち商船団を無傷で捕えたいってわけかい？』

『ええ。その目的は不明ですが、これまで我が軍が商船団や輸送船の行方不明現場の検証を行つた限りでは、現場の兵器使用の痕跡や艦の残骸がないことから、攻撃を受けていないと思われます。』

『と言つことは、素直に投降せざるを得ない状況に追い込まれたってこいつたな』

『おっしゃる通り、圧倒的な戦力で囲まれるなど逃げることができない状況に追い込まれた可能性が高いかと思います』

『なるほどな。で、敵への対策はあれでいいのか？』

『ええ、民間船であるあなたがたに戦つ義務はありませんが、今は特別にお願いせざるをえず、申し訳ありません』

『何をいつてんだ。何もせず訳のわかんねえ敵に捕まるよりやあ、抵抗するのが漢つてもんだろ？』

『うちの艦長は女ですがね』

『字がちげえよ。あの艦長も立派な漢だよ。ボウズから伝えといてくれ』

『それ、喜びますかね？伝えたことで、私が睨まれたら船長に謝罪と賠償を要求しますよ』

『それこそ自己責任つてやつよ。まあ、何にせよ姉ちゃんとボウズに命を預けるわ。よろしく頼むぜ』

『うひうひうひ。この艦のことは気にせず、逃げ切つてください』

二ツカは破顔一笑し、立派な敬礼をして通信を打ち切った。

僕はオペレーター席に戻り、///に話しかけた。

『///。///?』

『…マスターなんて、あの年増と修羅場になつて刺されて死ねばいいもん』

『///?…』

『勝手に置いてくんだもん。マスターなんて嫌い』
おお、そこはかとなくショックが大きい。娘に「パパ、嫌い」と言われたらこんな悲しい気持ちになるのか。

『ごめんね、///。』

娘だったら、頭をなでたりするのだろうか。

『悲しい? 頭なでる?』

『そういえば、考えたことが分かるんだよね。』

『うん。マスター、///に嫌いって言われて悲しい気持ちになつたの?』

『そうだよ』

『うーん、そつか。じゃあ、今回は許してあげる』

PAIに許してもらう人間というのは、客観的に見てどうだろうか。…どう考へてもダメ人間だった。

『ありがと。そうそう、さつき敵が襲つてきてからの動きについて、分析してくれたんだよね』

『うん。マスター、見る?』

『うん、見せて』

分析された敵の情報 艦隊編成、光学兵器の出力、装甲の厚さ、乗艦員数がオペレーター席のディスプレイに表示される。大きな数値

が並ぶ中、僕の目を惹いたものがある。

『乗艦員数が1?』

『うん。一人のパルスしか見えなかつた』

『パルスが見えたの?』

『うん。マスターといつやつて会話してる時みたいに、パルスの流れが見えたよ』

『どこに?』

『うーんと…宇宙空間?』

言葉は理解できるが、内容が理解できない。少し、落ち着こう。あの艦隊には1人しか人間がいなくて、パルスが宇宙空間で見えた…やっぱり分からないうぞ。

ん?待てよ、そういえば、敵の動きは、マリアが我が軍の精銳でさえできない動きと言つていた。どういうことだ?

我が軍にはどうしてできない?

人間には行動限界があるからだ。AIによる自動化がなされているとはいえ、オペレーターするのにんげんであり、人間が命令を受けてからの反応速度の遅延、キーを押すまでの時間、ミスを恐れての緊張によるエラーなどが行動限界を決定づける。訓練によつて慣れることでできる限り早くなるが、上限はある。

なるほど、人間の行動限界を超えた艦隊運動、そして、乗艦員数。見える脳電磁パルス。僕の中で仮説が組み上がる。

『ねえ、///?』

『なあに?マスター』

『///?で、もしかしたら僕の脳電磁パルスが///?伝わるのを邪魔することできるの?』

『うそ、できるかへ。』

『どうやるのっ。』

『「へんとね・・・』

僕の仮説が正しければ、僕にしかできないやり方で、敵と戦う」と
ができるかもしない。戦いの高揚感とは違った、よりよいブログ
「ミミングを発見した時のよつやかな快い緊張がみなぎる。

『///, 今から囁つことをちつともこころへくれる? とても大事なこと
なんだ。』

『うん、いいよ、マスター。あ、でも』

『どうしたの?』

『マスター、お願ひがあるんだけど』

『何?』

P A I H おねだりされる僕。字面だけみるとヘンタイそのものであ
る。

『うんとね、すぐにでなくともこいんだけど。///, 身体がほしこ
なあ』

それは無い物ねだりとこつものだ。しかし、僕は科学者を目指す者
だ。あきらめれば、そこに科学の発展はない。試合終了なのだ。

『うん。僕の持てる力を注いで、///に身体を用意するよ

僕の運命は、こつして決定づけられた。

8・クライ・フォー・ザ・ムーン（後編）

拙こね話を聴んでいただきありがとうございました。

天頂方向を上、標準銀河横断面を基準として地球方向を北とすれば、我々が最短距離を取る場合、メディニ力星系に東南東方向下側から侵入し、恒星メディニ力の東側を通り、北西方向上側に抜けという進路を選ばざるを得ない。しかし、現時点で恒星メディニ力の重力場は東側に傾いており、重力影響域に入つてからの加速は、通常よりもエネルギーを消費する。したがつて、メディニ力星系に侵入する前の時点で最大速度を得、ちょうど重力影響域に位置するメディニ力星系第1惑星を利用した增速スイングバイ（すでに推力があるのでパワードスイングバイか）を行い、重力影響域での減速を減らすとともに、一気に亜光速まで加速し小惑星帯に突入することになる。

敵は、重力影響域まで計算していたわけだ。我々が亜光速で小惑星帯に突つ込んで来ることぐらいは誤差の範囲だらう。おそらく、小惑星帯を抜ける切る直前に300隻から500隻が密集隊形でルートをふさぐ形で待ち伏せているに違いない。これへの対策は、ある程度の質量を持った物体を亜光速でぶつけ、穴をあけてそこを突破するしかない。僕が戦術シミュレーションでマリアの機動艦隊を破つた手法である。バカの一つ覚えのような気がするが、戦略用兵器が搭載されていない軽戦闘艦にできる作戦は限られているのだ。

しかし、ミミの分析によつて一つの可能性が浮上してきた。僕は、マリアに報告をする。

「艦長、相談があるのでですが」

「あら、プライベート通信なんて気が利くわね。」

「傍聴の危険を防ぐためです。他意はありません。それよりも、仮

想ディスプレイを見てください」

「つまらないわね。…ん？これ、どういうこと？」

「私のP.A.I.は、『ご説明した通り特殊なものです。自分でもどのようなプログラミング理論に基づいて設計されているのか全貌は分かっていません。そして、私のP.A.I.は、様々なオプションを持つています。その一つが、生命探査機能です。調べた結果は信じがたいですが、あの敵艦隊には人間は1人しか乗っていない

「信じられないわ」

「ええ。ただ、マリア先輩がおっしゃってたではありませんか。我が軍の精銳にもこれほどの動きはできないと」

「うーん、なるほどね。複数の人間の行動限界を破ることができたのは、単数の人間が動かしているからということね。納得はしたくなきけど」

「おそらく。原理は分かりませんが、敵は一人で艦隊を動かすシステムを持つているようです。」

「で、これを私に見せたのは、何か意図があつてのものでしょう？」
「理解が早くて助かります。実は、試したいことがあるんです。先ほどの作戦には支障を来たさないとと思うので、許可を願おうと思いまして。」

「ええ、許可するわ。」

「ええ！？まだ、内容をお教えしていませんが」「ただし、内容を教える以外にも条件があるわ」「な、何でしよう。奴隸になるのは無理ですよ」「そんなこと言わないわよ。心外だわ」

かつて言つたことあるから懸念しているのだ。心外なのは僕の方である。

「条件はね・・・」

マリアから出された条件は、意外なものだった。別に、条件として出さなくていつもマリアが僕に無理やりしていることだ。まあ、

いずれにせよ生き残った後の話である。

「巨大質量兵器、用意できました。まさか目の前で、ショーン君が想像した兵器を見れるとは思いませんでしたわ。つて、プライベート通信中だったんですね。またまた、お熱い事で」ベルタの報告がディスプレイ上に現れる。

「また邪推です、先輩」

「あら、でもマリアの嬉しそうな表情を見れば、そう推察しても致し方ないことですわ。ね、マリア？」

「う、うるさいぞ、ベルタ。…さて、そろそろ、メディニガ星系に突入するか」

ベルタは、声こぼ出していないが、腹を抱えて笑っていた。

航行はいたつて順調に進む。順調だ。順調に敵の罠にはまつているのだ。もちろん、敵の罠にはまらなければ、勝利も望めない。虎穴に入らずんば、孤兎を得ずである。ちなみに、これは養母が言つた言葉ではない。

『ところどざ、ミミ』

『何ですか、マスター』

『ミミなら、あの敵艦隊がやつていた動きができるかな』

『ミミ、一人で動かすんですか？ それぞれの艦にミミの指示を受け取るレシーバーがあれば、できる思うよ、マスター』

『そうか、偉いね、ミミは。』

『えへへ』

『じゃあ、あの敵艦隊に乗つていた一人が、攻撃をする瞬間とか、

攻撃方法とかパルスから読み取れるのかな？』

『うーん…初めてなら無理だと思うけど、練習すればできるよう

なると思つよ』

『//は、ガンバリ屋さんだからね』

『うん！マスター、偉い？』

『偉い。偉い。』

なるほど、//ならできる。そして、//には敵の電磁パルスが見えた。といふことは、警戒しておいてもいいだろ。

「艦長」

「なあに？シヨーン」

「できる限り、作戦のこととか、攻撃のことを考えない、といふことはできますか？」

「その必要があるなら、するわよ」

//がきて敵ができないといふ保証はない。//は視覚で電磁パルスをとらえることができる。攻撃のタイミングや、もしかしたらそれ以上のことを読み取られるかもしない。

「ええ、未知の敵ですから警戒しておこうと思ひます。今回、艦長は号令なしでも構いませんか？」

「構わないわよ」

「え？『撃て！』とか言えないんですよ？いいんですか？」

「シヨーン、あなた、私のこと誤解してるわね」

あ、また獰猛な猛禽類のような表情だ。あとで、付きまとわれて色々と言われることが決まったようだ。本当に、口は災いのもどだ。

『といふことで、//。タイミングとかすべて任せたが、構わない。』

『大丈夫だよ、マスター。//任せとおいてー。』

艦は、第1惑星を利用したスイングバイで加速し、小惑星帯に向かう。亜光速航行に入るとき、僕ら宇宙孤児にはあまり違和感がないが、惑星出身者の心身には極めて負担になると聞く。しかし、マリアもベルタも表向きは平氣そうに見えた。ベルタは、たおやかな笑みを浮かべている。こんな時は、絶対心の中で、人を罵倒しているに違いない。マリアは、ニヤニヤしたり、時折頬を赤く染めてポーッとしたりしているが、何を考えているのだろう。

そういひしているうち、我が艦と商船団は運命の小惑星帯に突入した。

9・嵐の前（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

我が艦の後ろに菱形陣形をとりながら4艦の商船が続いている。艦内から見れば、それは遅々とした歩みであるが、外から観測できるのであれば、一陣の風にしか見えないだろう。この小さな艦隊は既に加速を終え、巡航速度に入っている。///の示す緻密な航路計算がなければ、小惑星に衝突し、蒸発を遂げているはずである。

我々は、まだ艦内最外郭に質量兵器を隠している。戦術シミュレーションとは違つて曳航しながらの加速は不可能だったからだ。曳航したままだと艦が十分な加速を短時間で得られないのだ。そして、もう一つ戦術シミュレーションと違う点は、質量兵器として使用するのが、惑星の残骸ではなく、氷の塊である。氷塊は、星系に侵入する直前、外周惑星の周囲を公転していた氷の残骸を切り取ったものだ。ベルタが興奮したほどその質量は大きい。

たとえ亜光速で航行していても、この小惑星帯を突つ切るのは、数時間を要する。惑星出身者には、辛い時間だらう。しかし、艦橋にいる一人の女性は、事も無げにすごしていた。胆力の問題だらうか、訓練を経てもここまで耐えられるようになるのは珍しい。僕は、この一人が宇宙の戦場に自らの身を投じる覚悟とその適性を目の当たりにし、正直に驚いていた。

『マスター、あと1時間程で、敵に遭遇する予定宙域です』

『///、この会話は外部には漏れないの?』

『うん、絶縁物質の膜を張ることでそれを防ぐことができるの。どれだけ伝導性が高くても所詮、電気が源だから。この艦橋内に絶縁物質の膜を張つたから外部から電磁パルスが観測されることはないとよ』

『そつか、じやあ安心だ』

変化が現れたのは、30分後だつた。ミミが持つ高性能観測装置の一つである、赤外線観測、電波観測とともにこの先に数百隻の艦隊が行く手を阻んでいることを示している。

僕は、マリアを見る。マリアは僕につなぎ返した。それが、この戦いの開始の合図だつた。

ミミが報告モードで言葉を紡ぐ。

『…質量兵器、艦外に放出 商船団においても完了を確認 質量兵器、問題なく曳航中 当艦の質量兵器の照準設定 商船団の質量兵器、照準を当艦前方、敵艦隊上部に設定 照準誤差を修正…』

そして一呼吸おいて、最終確認を告げた。

『当艦の質量兵器、射出します。マスター、許可を』

「艦長、やつぱり号令を言つても問題ないよつです。お願ひします。

「ああ。わかつた…・第一射、放て！」

ベルタが組み立てた、簡易力タバートから、氷の塊が宇宙空間に吸い込まれていく。その先には、数百の敵がいる。我が艦から放たれた氷塊は、敵艦隊上方に逸れていく。氷塊は、敵艦隊を掠めて飛んでいく。そして、敵艦隊の上方にあつた大きな惑星の残骸に衝突した。

大爆発が起きる。目視できるほどのまばゆい炎が上がる。仮想ディスプレイには、氷塊から小さな金属片が敵艦隊を覆つよう

に広がる様子が見える。////に用意して貰つた絶縁体入りのチャフだ。

「第一射、いけます！」

僕が報告する。この機会を逃してはならない。

「全弾、放て！」

マリアは、間髪いれずに命じた。

商船団が曳航した4つの巨大な氷塊は、敵艦隊上段に向かう。商船団は、氷塊を放出したあと、その軌道を追いかけるように走る。敵艦隊は、予想どおり動かない。おそらくチャフの効果だろう。氷塊が敵艦隊にぶつかる。巨大な氷塊が4つも飛んできたのだ。凄まじい爆発が起きる。敵艦隊の上半分にいた150隻余りの戦闘艦がその巨体に根こそぎ巻き込まれた。

爆煙が晴れるや、そこに我が小艦隊が飛びこむ。敵艦隊と交差する直前我が艦は、商船団に追い抜かれた。商船団は、残存する爆風に船を乗せたのだ。熟練の読みがなければ、爆風に吹き飛ばされているはずである。一ヶ力船長の采配だろう。我が艦は、商船団の殿になる。絶妙のタイミングだった。

『////、敵の旗艦はわかる？』

『うん。生体反応があるのはあの左下斜め前の大戦艦だよ。』

『じゃあ、あれをよく観察しておいてくれる？』

『はい！マスター』

敵の旗艦と思われるその戦艦は、重量級戦艦の中でも特大級である。主砲は、戦略級兵器だろう。主砲が動く。前方、商船団が狙わ
れている。

「艦長！俯角27度左三列目の艦が敵の親玉です！商船団が戦略級兵器で狙われます」

「ベルタ！撃てるか？！」

マリアが叫ぶ。反応が早い。

「当然です」

「ありつたけの弾をあのバカでかい戦艦に向けて・・・撃て！」

光学兵器が瞬時に着弾し、さらにミサイル群が弧を描いて、敵の旗艦に命中する。爆煙が舞い上がった。亜光速で航行中、ミミのようなP.A.Iの制御がないのにも関わらず全弾を命中させた。これはもはや職人芸レベルだろ？と僕は思った。ベルタの腕は超一流だったのだ。

攻撃の反動によって艦の速度は落ちる。半減といつても差支えないだろう。急ぎ再加速を図る。しかし、そのとき我が艦の前方に100余りの戦闘艦、そして気がつくと後方にも同数の敵艦が回り込んでいた。チャフの効果が切れたのだ。水も漏らさぬ布陣。我が艦は一瞬の猶予も与えられずとも簡単に包囲されてしまった。下には、敵の旗艦もいる。あれだけの光学兵器やミサイルを撃ちこまれながら装甲に傷一つないようだった。

「我々の全力をここまで見事に破られると、かえって爽快ね。まあ、任務は果たしたし、あとは、カールがうまくやつてくれるでしょう。私たちは、未知との遭遇に備えましょう」

マリアは、僕とベルタを見て明るく笑った。

10・既知の遭遇 未知との遭遇（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

「マリア先輩」

僕は、オペレーター席からマリアに呼びかけた。

「何？ショーン」

「あの時保留にしたお願い事を、今してもいいですか？」

マリアに勝利した際に、なんでもお願いことを一つ聞くと言われていたのだが、僕はそれを断り続けていた。人気絶頂のマリアに、あまつさえ、辛うじてとはい、戦術シミュレーションで勝利し、それに加えてそれを理由に何かをねだるなど、命がいくつあっても足りなかつたに違いない。

「うーん…ダメよ。ちゃんと生き残つて帰つてから聞くわ

「…わかりました。」

「物分かりのいい子は好きよ。でも、こんなムードのないところでのプロポーズしなくてもいいじゃない？ベルタだつているのに」

「はい？」

マンガで言えば、僕は今『テフォルメされた絵になつて』いるところだ。

「こんだけ一緒にいたものね、いくら鈍感なショーンでも私の魅力に気づかないわけがないわ。教官や軍の上層部と取引をして、連れてきたかいがあつたわ。」

『冗談かと思えば、そうではないらしい。得意の暴走独り言。視界の端でベルタが、腹を抱えて、指をさして大笑いしている。やめてください、先輩。とばつちらは僕に来るんですから。』

「あの、先輩？」

「なあに、私のショーン」

ふんわりとした綿のボールを投げてよこすようなイメージの甘い声。いつの間にか、マリアの所有物になつている僕。しかも、さつきツツ『ノミ』を忘れましたけど、僕が実地訓練についてきたのは、相当な

特例つてことですか？？それに、マリア先輩が取引つていう場合、だいたい脅しが込みになつてゐるんですけど？

「いやいやいやいや。マリア先輩。ちょっと聞いてくださいー。」

「ええ。聞いているわよ。」

まるで聞いていない。絶対、脳内お花畠で絶賛お遊戯中だ。

「先輩、このままだと僕たちは帰れませんよ。」

「あ・・・そうだった。ショーンの声を聞いたら、戦いのことを忘れちゃつてたわ。」

ベルタはついて声に出して笑つた。

「敵がどのような言語、文化を持つてゐるのか分からぬ限り、白旗を上げることすら危険です。」

僕はよつやく説明にこぎつけた。

僕は、艦長席にやつてきた。ちよつと氣まずさのあるマリア。僕だつて気まずいですよ、全く。とはいへ、マリアは優秀な人である。すぐに軍人として思考を巡らせ始めた。

「ですから、今から敵との交渉を一任してもらえないかとお願ひしたかつたんです。」

「へ？ そんなことに、私へのお願い事を使おうと思つたの？」

「ええ。本来、艦長がすべきことを、上級軍曹」ときが一任してもらつわけにはいかないでしょ？」

「…ショーン、あなたは私が反対すると思つたわけね？」

凄まじいプレッシャーを感じる。怒つてこらつしゃる？

「ショーン…」

地獄の底からの重低音のよつこ僕には聞こえる。

「あとで、艦長室にこらつしゃる。教えてあげるわ。」

「な、何をでしょ。」

無言で僕を睨むマリア。怖い。田的語がないことが怖い。しかし、それも生き残つてからだ。ただ、生き残つた上で、この世に生まれた後悔を知ることになるらしい。理不尽にもほどがある。

どつと疲れてオペレーター席に帰る。

『マスター』

『どうしたの？』

『ミミがあの年増から守つてあげる』

ああ、なんて優しい子に育つたのだろう。

『……たとえどんな手段を使っても』

黒い！黒い！ミミー！いつの間にそんな娘になつたの？

何か、敵に囮まれ銃を突きつけられている緊張状態のはずなのに、何でこうも緊張感がないのだろうか。こちらに打つ手がないゆえの、明るいあきらめ。これは、マリアやベルタの醸し出す雰囲気、つまりは仁徳だろう。暗く思いつめても、事態は打開できない。開き直る方がいい時は確かにある。

『マスター、敵から通信が来たよ』

『ちなみに、ミミにしか分からない方法で来たんだね？』

『うん。たぶん古代地球語だと思つ』

僕は、古代地球語というのをよく知らないが、そのいくつかの単語はこの時代にも残つていると言われる。「ヘンタイ」ももしかするとなうなのかもしれない。

『そう。で、敵は何て言つてるの？』

『えーとね、おとなしく投降すれば、乗組員を捕虜として遇し、命は保証するって言つてる。回答期限は10分後だつて』

「艦長、10分以内に投降するよう勧められていますが」

「僕は、マリアに通信をする。

「Ｚ〇〇と言いたいところだけど、何か手はある？」

「やつてみたいことがあるのですが、構いませんか？」

「さつきも言ったとおりあなたに任せます。あなたのP.A.Iにしかできないことがあるんでしょう？私は、あなたがやることなら私もベルタのためになるに違いないと思ってるの。……さつき、我本当にシヨツクだったのよ。だから、ちゃんと言葉にしておくわね。私はあなたを全面的に信頼している。軍人としても、一人の人間としても、ね」

「……ありがとうございます」

僕は、この人の信頼に足るかとか、そういうことを考えたこともなかった。僕には、自分が宇宙孤児であり、どう足搔いたとしても差別される側なのだと、いう自覚、いや、諦めがある。それは簡単にぬぐい去れるものではない。成長するにつれて有形無形の侮蔑の眼差しや手痛い裏切りに遭ってきたのだ。だからこそ、できる限り波風は立てないし、目立ちもしたくない。それが僕の行動原理だったと改めて思う。ただ、マリアやベルタには、そういう気遣いは要らなかつた。そういう気遣いをさせないようにしてくれていたのだと思う。この人たちの前で、徐々に人間としての振る舞いを取り戻しながらも卑屈な行動原理をぬぐい去れない僕は、この人たちにはどのように映っていたのだろうか。この人たちの信頼に足らんとしてこなかつたことは、この人たちに対する裏切りだったかもしれない。そんな思いがよぎる。

「私にお任せください。マリア先輩」

それは、僕がマリアやベルタを守るひとつ決めた瞬間だった。

『『『』、観測してた？』

『もちろんだよ。マスター』

『じゃあ……』

『うん、でもさきさつだよ
『そりかー！』／＼ほほ偉いなあ
『えへへ、マスター、／＼偉い？』
『うん、偉いよ。・・・じやあ、始めみづか
『はい！マスター』

ふつと空気が凧いだ。次に高音域の耳鳴りがする。頭が痛む。僕は
田を開じる。音が安定する。
痛みが薄らぎ、ゆっくじと田を開けると／＼の声が聞こえた。

『マスター、敵艦隊の乗つ取り完了しました

11・思ひ歸るのゆき（後書き）

拙こね話を読んでいただきありがとうございました。

結果から言えば、旗艦を残してそれ以外の敵艦隊を///の支配下に置いたのである。///には、旗艦から各艦に電磁パルスが通っているように見えていた。まるで僕と///が会話するときに流れる電磁パルスのようだ。原理から言えば、敵が用いている電磁パルスを分析し、こちらから敵の旗艦からの出力以上の出力を持つて、同質の電磁パルスを流せばいいのだ。///に敵の旗艦を観測させたのはこのようなわけだった。

『///、僕らの艦の前面に艦隊を配置。各艦の主砲にエネルギーを充填。照準を敵旗艦に合わせて』

『はい！マスター』

信じられないほどに素早く柔軟な艦隊運動で、僕の命令が実行される。もし、これを軍事研究家が眺めていたら、卒倒するに違いない。///の処理能力の高さがあつてのことだろう。補給基地を襲つたあの艦隊の陣形再編の比ではない。

さて、これでチヨックメイトになるだろうか。チヨックメイトなら平面であるはずの盤面に上や下から駒を持ってくるような強引な裏技だったと言える。しかし、我が艦のミサイルでは、傷一つ付かなかつた敵旗艦である。200隻の戦闘艦といえども、致命傷は与えられないかもしれない。なにせもはやチエスのルールは破られたのだから、何があつてもおかしくない。

『マスター、通信です。直接マスターにつなぐよう言われています』

『僕に？じゃあ、同時通訳できる？』

『マスターのためにがんばります』

『頼むよ』

仮想ディスプレイに表れたのは、この世の存在とは思えないような人物だった。透き通った身体から光を発しているように見えた。眩しいと思つた瞬間、急に光が消える。そこには、ストレートの長い黒髪、黒目の中柄な女性（というか、少女と言つた方が正確だ）がいた。

『やはり、あなたには効かないらしいな』

『田ぐらましでしょうか？』

『いや、催眠だよ。そちらの一人には効果があつたらしい。』

振り返ると、確かにマリアとベルタは眠つてしまつていた。僕は思わず目を細める。言い知れぬ怒りが湧いてきたのだ。自分がこれほど怒りの感情をもつとは自分でも少し驚き、自制しようとした。

『誤解しないでいただきたい。別に暗示をかけたわけじゃない。少し眠ついてもらおうと思つただけだ。理解できる者にしか話せないことがあるからな』

「…で、どのようなお話を？」

『我々の正体』

昨日の夕食の献立を答えるように軽く言つ。

『それは、興味深いですね』

『まあ、あなたが警戒するのも無理はない。私としては、絶対負けはづのない戦いなのに、あなたにこうして追い詰められてしまつた。取引をして見逃してもらおうと考えても、当然だと思うが』

交渉にはブラフがつきものである。追い詰められてくると言つが、奥の手がないとは限らない。いや、奥の手があるからこそ、交渉に持ち込もうとしていると考えるべきだ。

「私が追い詰めたのではないかもしれませんよ。私は艦の責任者で

はありませんので

『 そのような韻晦は無意味だよ、ミスター。あなたが私の艦隊を乗つ取る能力を持つていいよう、私も話している相手が嘘をついているかどうかを見抜くぐらいの能力はある。それに、私もあなたも 宇宙に住まう者だ。仲良くとまではいかないが、同胞として最低限の礼儀はつくさうと考えている。そこは信頼していただくほかはない』

「なるほど。無意味な腹の探り合にはやめようと言いたいわけですね」

『 そうこういとじだ』

「 いかの目的は、少なくともマリアとベルタを安全に惑星連盟に帰還させることだ。僕も覚悟を決めた。土俵に上がってやろうじやないか。」

「 分かりました。少なくとも、あなたも私もこの話合い中に騙し討ちをしようとしていないということを共通の土台にしてしましょう。」

『 無論だ。まずはそれで構わない。で、いいだろうか？我々の目的と正体を話しても』

「ええ、どうぞ」

『 我々は、惑星連盟の人人が言つ『宇宙世代』の子孫なのだ』

少女は、事もなげにそう言った。

12・宇宙へ参る 住まい者（後書き）

拙いお話を読んでいただきましてありがとうございました。ありがとうございます。

別の進化を遂げた人間だとか、地球外由来の人間種だとか言われた方がまだ信じられる。この未知の存在が、我々の歴史に空いた大きな穴とも言うべき謎と関係があると言われても、僕の常識が納得することを阻んでいる。

『信じるか、信じないか迷っているような顔だな。是非もない。我々は、ここしばらくの間、あなた方の文化圏に生きる者の調査をしていた。だから、私はあなた方が語る宇宙世代の物語も、その後の歴史も、宇宙空間で子をなすタブーも、そして宇宙孤児の扱いも知っている』

「…海賊行為にしてはスマートなやり方だと思つていましたが、やはり目的はサンプリング調査だつたんですね」

僕は無意識のうちに話をそらしてしまつ。僕は言いつのないひどく恐ろしいことに出会つたような感覚に陥つていた。

『誤解のないように言つておくが、拷問や催眠誘導など、あなた方がやるような尋問などはしていない。我々は地球世代から続く、捕虜の扱いに関する規則を順守している。』

「別に私は、惑星連盟を代表してあなた方を非難する資格などありませんよ」

『しかし、心情的には別だらう。同胞をぞんざいに扱われてうれしく思う者はいないからな』

そういうえば、この少女の話し方は、同時通訳している////が設定したものだらうか。見た目と口調がそぐわないことになりますら気づく。『なるほど。攫つたものを政府に通告せず捕虜扱いにしたことや、その捕虜の処遇に関してここで議論しても益のないことですので、保留しましよう。しかし、『自分は宇宙世代の子孫だ』と言われて『はい、そうですか』と言えるほど、私は想像力豊かな人生を送つ

ておりませんので、簡単には受け入れられないことは確かです「

そう、宇宙世代の問題は、僕の出自やこれまでの人生に関する前提であり、私とこの世界をつなぐ重要な物語なのだ。世界の関節を目の前の他人に外されるのは誰だつて御免被るはずである。でも、僕はこの物語^{「フォーエタニア」}に納得のいかないものを感じていたのも確かだつた。それゆえ僕は、未知を既知に変えゆく興奮と恐怖との狭間で揺れ動いていた。

『私とあなたの時間にも限界がある。詳細な証拠は、通信機器に送る故、後からそれを確認されればよかろう。いずれにせよ宇宙世代の物語は作られたものだということだ。我々の祖先は、それなりの理由があつてあなた方の祖先と袂を別つたのだ。』

「証拠とは、どのような？」

『移民船、ヴァレンシアの全レコード』

少女の言つ証拠が本当なら、その話を信じるしかなくなるだろう。我々の主星にたどり着いた移民船がヴァレンシアであり、主星到着後、歴史の中でそのレコードはほとんどが失われたと言われる。もちろん、少女の言つ証拠がねつ造されたものでないという100%の保証はない。しかし、全レコードを矛盾なく捏造するのはほとんど不可能なのだ。

僕は深呼吸を1つした。…確かに、祖先が地球を旅立つたとき、既に人間が持つ科学技術の水準は現在と比してもそれほど遜色ないほどだつた。少なくとも現在の我々の科学技術の基礎となる枠組みは既に出来上がつていた。これはほぼ間違いない。にも関わらず、宇宙世代が主惑星に到着する前にことごとく死滅してしまつたというのは、論理的にはあり得ない話なのだ。そのような論理的矛盾を指摘されると、医学的問題や心理学的問題として片付けようとする

人が多いが、それに従つたにしても論理の飛躍がありすぎる。とすれば、どこかで宇宙世代の子孫が生きていてもおかしくはない、可能性としては。これが論理的帰結だと僕自身は、科学者として、そういう考える。

『あなた方には、我々の祖先の軌跡もあなた方の祖先のそれも確かめるすべはどこにもなかつた。それゆえ、悲劇としての宇宙世代が物語として浸透していくもおかしくはない。しかし、これほど強固な前提、もつと言えば宗教的信念に近いレベルで信じられているのはどうしてか、あなたは考えたことはあるか?』

「・・・人間は根なし草にはなりたくないからですよ。だからこそ、自分のルーツに関する物語は、たとえそれが矛盾に満ちた神話でも守りたい。ただし…」

『ただし、それへのこだわりは外部からの脅威にさらされたときに最も先鋭的に表れる、ということだ。しかし、あなた方に外部からの脅威など、我々と接触するまで、いや、現時点でさえないと言つてもいい。その一方で、その矛盾した物語にこだわる多数の人々がいる』

「・・・何が言いたい」

『お分かりのはずだ。あなた方の文化圏に住まう者は意図的、戦略的にこの物語にこだわるよう、仕向けられてきた。内なる外部の脅威、あなたのような宇宙孤児という異端が存在することで』

それまで無表情だった少女が口元をゆがめてほほ笑んだ。

1-3. ハシシング・コンク（後輩や）

拙いお話を聴んでいただき、あつがとうござります。

その微笑みを見て、僕は我に返った。邪悪なもの、というのを言いつらふかもしれないが、少なくとも異質なものをそこに見たのだ。

「確かにあなたの言う通りかもしない。しかし、それはあくまで無限にある可能性の一つの答えしかありません。断定するには情報が足りない。そして、断定するほどの証拠をあなたは出せない。」

『…どうしてそう思うのだ』

「出せるなら、既に証拠を出しているでしょう。あれだけ僕らがひっくり返るような宇宙世代の秘密をあつさりとばらして、説明は後からでした。それは確たる証拠があつたからでしょう。その一方で、宇宙孤児の話は状況証拠と推論から結論を出そつとしている。それは推論の域をでないからではありませんか？」

『…』

少女は憮然した顔で黙り込んでいた。

「しかし、私が分からるのは、私なんかに搖さぶりをかけて、たとえ、私に惑星連盟に対する不信を抱かせても、あなたにとつてどんなメリットがあるのかということです。」

『…分からぬはずがなからう。それは一種の謙遜か？そうでなければ、そこまで考えることができて、なぜわからない』

「うーん、…やはり、分かりません。自意識過剰でなければいいのですが、あなたが私を味方につけようとしていると考へても、私程度の人材など惑星連盟には掃いて捨てるほどいしますし…』

『掃いて捨てるほどいるわけがなからう…』

少女は叫んだ。怒りだらうか、ブルブル震えている。

『軍務司であるこの私が、銃口を突き付けられるなどそうそつあつてたまるか！宇宙に住まう者の剣と盾そのものである私が！何たる屈辱！』

駄々つ子のように地団太を踏んで叫ぶ少女。ああ、びっくりした。ぶつくさぶつくさ文句を言つてゐる。田尻には涙が浮かんでいるようだ、ちょっとかわいそうになつてきた。さつきまでの冷静な交渉役はどう行ったのか。「軍務司」とは何だらう? 地位みたいなものか。確かに、艦隊を率いることができる少女だ、何らかの役に就いていておかしくない。

「いやいや、私は訳あつて人と違う道具を使ひますが、ただそれだけの、本当に普通の技術者志望の士官学校生なんです。そもそも、勝負は時の運と言つではないですか、お嬢さん」

何て呼べばいいのか分からず、「お嬢さん」と呼びかけた。何か、こう慰めたくなつたのだ。女性、特に年下の女性に甘いのは僕の悪い癖なのかもしない。しかし、もちろん僕はロリコンではない。

『お、お、おおお

「?』

『お、お嬢さん?』

「ああ、失礼でしたら謝罪します。なにぶん、そちらの文化は全く知りませんもので」

『そ、そ、そ、そ、うか…私を呼ぶときは、ミドリと呼びなさい。キリエ・ミドリ。キリエがファミリーネームだ』

「はあ、ミドリ様ですね。私は、惑星連盟宇宙大学校工廠科の学生で今は、臨時で上級技術軍曹をしておりますショーン・ヒルガと申します。ヒルガがファミリーネームです。」

『せうか。私は軍務司、そちらで言つた宇宙艦隊管区司令を務めている』

『……はい?』

かんくしれい?管区司令か…ええ?…こんな僕よりも年下に見える少女が、惑星連盟では中将を以て充てる相当な軍幹部?…ちよつと、そつちはどうなつてんの?年端もいかない子どもに戦争させるなんて児童虐待?それとも、僕よりもはるかに年齢が上なのかな?

? こんな疑問が湧いてない交ゼになつてロヒ出た言葉は「はー?」の一言だった。

14・検証に耐えられぬ仮説（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございます。

『あなたの驚きは、何に由来しているのだ？』
「あなたのような若くて可愛らしい女性が、軍人で、しかも軍幹部ということです」

余計な言葉まで出たような気がするが、若い女性と対極に位置するものが軍幹部というものだ。どれだけ女性の社会進出が進んでも、戦争の担い手が男性主体であることに変わりない。女性の自己決定権を主張する人の中には、女性が軍人として戦う権利を主張するラディカルな人もいたが、それに対しても大きな賛同は得られなかつたのだろう。もちろん、軍内で女性の兵士や士官はたくさんおり、待遇も男性と同じだが、軍幹部となると、グッと女性の率が下がる。敵はそうではないということなのだろう。

『か、か、か、可愛らしいだと？』
大きな目を見開く少女。意外と表情豊かで人間らしい。ちょっと親しみを持つことができました。

「そんなこと言つてしましましたが、失礼しました。ただ、我々の文化では珍しいと申し上げたかつたのです」

『い、いや構わぬ。あなたに容姿を讃められたこと、悪い気はせん』
「はあ、それは安心しました」

『話を戻そう。我らの間では、能力が全てなのだ。そこに年齢や性別などが関与する余地はない。全ての職業がそういうわけではないが、特に努力だけではどうにもならない天賦の才能を要する職業は完全なる能力主義だ』

「でも、それで問題は起きないのですか？」
『才能に対しても科学的な測定手段が確立されている。紛争もあるにはあるが、紛争を起こすリスクは高い』

「リスクが高いにせよ、人間である限り、嫉妬や悪意と無縁でいられるものではないと思うのですが」

『もちろんだ。しかし、我々は、同胞の数が多いわけではない。人に課せられる職責や使命も必然的に重なる。それゆえ、嫉妬で人を追い落とす必要がない。能力を発揮する場は一つではないからな』
『しかし、宇宙世代から既に1000年になろうとしています。世代で言えば、40世代前後でしょう。環境が安定していれば同胞は幾何級数的に増えていくはずではありませんか？・・・いや、ひとつとして遺伝子操作ですか？』

遺伝子操作技術は、我らにとつて完全なロストテクノロジーだ。地球世代は、科学技術の粋を移民船、ヴァレンシアに積み込んで太陽系を旅立つた。そのなかには当時、科学技術の最高峰と謳われた遺伝子操作技術もあつたはずだ。しかし、我々の祖先が主星に到着したときには既にその全てが跡形もなく、消え去っていた。ミドリの祖先が、何らかの理由で持ち去つたのかも知れないとふと思つたのだ。

『そうとも言えるし、そうでないとも言えるな。人が宇宙空間に適応するのはとても過酷なことだったのだ。我らの祖先は、数世代かけて遺伝子操作技術によつて宇宙空間で生きる術を獲得した。しかし、それと引き換えに犠牲にしたものも甚大だつた』

少女が語つたのは次のよつた物語だった。

宇宙世代は宇宙放射線の影響で子を為すことが困難だつた。これは地球世代が誇る医療技術や遺伝子治療によつてもどうすることもできなかつた。そこで、彼らは加齢の抑制と寿命の延長に手をつけた。宇宙空間で生まれた世代も、世代を経ても生殖能力の強化には至らなかつた。こうして宇宙世代は、人工爆発も起ることなく、世代

交代が緩やかに進行することとなつた。

宇宙世代は、目的の惑星が近づいてきたとき、惑星での自らの適応能力を予測した。その結果は惨憺たる有り様だつた。彼らは、宇宙空間といつ極めて過酷な環境に適応することに特化しきったのだった。

『こうして、我らの祖先は、移民船を離れ、宇宙に住まう者としての生活をはじめたのだ。』

『なるほど。しかし、宇宙世代が惑星到着世代に遺伝子操作技術を全く遺さなかつたのはどうしてだつたのでしょうか？』

『正確なところは推測するほかはないが、これから希望の地に住まう者に、宇宙空間に再適応する過酷さを経験させたくなかつたのではないか。自らの経験から、人類種の発展に遺伝子操作技術がかえつて悪影響と考えたのかもしれない。彼らの身に起きた悲劇を考えれば、少々感傷的な対応をしても致し方なかつたのではないか』

『それは納得できる話です。遺伝子操作技術は宇宙に住まう者にこそ必要で、地上の樂園に向かうものには必要ないと考えたというのには、あり得るでしょう。・・・なるほど、あなた方がやつていたサンプル調査というのは、遺伝子検査ですね？そして、私たちの遺伝子に目をつけた』

『・・・それも目的の一つではある。それは我らのエゴイズムに満ち溢れた目的だ。即物的だし、私自身は吐き氣がする思いだ。しかし、話はそう単純ではないのだ』

『どういうことです？』

『あなた方には我ら以外に敵が存在する。出会うのは時間的な問題だろう。10年以内には戦端を開かざるを得ない。ショーン・ヒルガ、あなたに出会うまでは光明も見出せなかつたが、いざれにせよ今まであなた方は負けてしまう。しかも、その敵は我らにとつても、極めて危険な存在なのだ。我らのエゴイズムに満ちた目的

は差し置いて、できる限り早く共闘関係を築かねばならない事態になっている。ショーン、あなたに協力を仰ぎたい』

結局、僕を揺り動かしたのは、驚愕すべき真実などではなく、少女の真剣な瞳と切迫した声だったのだと、僕は後に回想することにつた。

15・ロストテクノロジーと~~宇宙~~世代の軌跡（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございました。

いつも読んでくださる方、お気に入り登録をしてくださった方に心から感謝を込めて。

16・戦乙女たち（前書き）

読んでくださる方に心から感謝を込めて。

「ちょっと待ちなさい！」

今、出てこられるとややこしい人の声が聞こえる。

「なんか気がついたら面白い話をしてるじゃない。でも、ショーンを味方にしたいのなら私を通してもらおうかしら」「うん

ああ、やっぱりややこしい。いずれにせよ、マリアが交渉役になつた場合、僕がフォローしなくてはならなことが山のようになると増えるのだ。

『ミミ、一応、マリア先輩の声も向こうに通訳してもらえない？』
『はい！マスター』

『あなたは、臨時の艦長。彼はその臨時の部下に過ぎない。どうしてあなたを通さなくてはいけない』

「それは・・・もちろん、私とショーンどが将来を誓って合つた仲だからよ」

もちろん、嘘である。あるいはマリアの脳内での話である。

『...それは真実なのか？』

少女は僕に尋ねる。なんかこの娘、眼力強ええ。真実かと聞かれれば、そうではないので、僕は首を横に振るしかない。マリアが後方で強烈なプレッシャーを以て僕をにらんでいるような気がする。いや、確実ににらんでいるので、僕はマリアのほうを見ない。絶対に見るものか。

『どうやら違うらしいが』

「・・・まったく、ショーンは照れ屋さんなんだから。」

マリアの脳内で、勝手な解釈がなされる。

「でも、あなたの言葉からすれば、ショーンの力を借りて、10年以内に我が軍をその強大な敵と戦えるようになります」とでしょう

？

『そうだ。彼の力があれば敵に勝てるかも知れない。貴様たちが最初所属していたあの小艦隊にできなかつたことが、彼にはできた。現に私は銃口を突きつけられている。一方、我々は戦うことはできるが、圧倒的に数が足りない。敵に勝つには、純粹な戦力が不足しているのだ』

「そう。…なら、私の力も貸してあげるわ。」

『ほう、貴様にどんな力があるというのか』

「私なら、数年内に軍内の誰にも手が出せない独自の部署を作ることができる。実際、あんたのためじゃなく、そうするつもりでいたし。つまり、軍内にあんたたちに協力する集団の橋頭堡を作れるってことよ。それがなければ、我が軍を抜本的に改革して、強化することなんてできないわ。それとも何か非人道的な手段でも採るつもり? そんなことショーンは望まないわよ』

『む… そなたの言つことに一理あるな。しかし、それをビリやつて実現するのだ? 妄言なら誰でも吐けるぞ』

「私が現惑星連盟軍宇宙艦隊参謀総長の娘だからよ。訳あって母親の姓を名乗つてはいるけどね。今の惑星連盟軍は、残念なことに家柄や派閥が物を言つ世界なのよ。でも、この際利用できるものは利用すべきだし、私たちの世界が崩壊するのを黙つて見ているのは私の性に合わないわ』

僕は、マリアの出自を既に知つていたが、マリアの口からそれを聞くのは初めてだった。

『なるほど、それなら合点がいく。… そなたにも協力をお願ひ申し上げる。非礼を許されよ』

「別に気にしてないわ。マリーベル・フォーゲルトよ。でも、ショーンは私のものだから手を出さないでね』

『キリエ・ミドリだ。しかし、あなたは法的にショーン・ヒルガの自由を束縛できない。無論、私の自由もだ』

「『ふふふ…』」

二人とも友好的な笑みを浮かべているが、そこに火花が散つている

よう見える。主に僕の身柄の自由に関するところのが納得できない。

「また、面白いことになつてますのね」

「ベルタがいつの間にか真後ろに立つていた。

「当事者である僕の意見は聞かずに、僕の自由に関する議論がなされるのには一々ツッコムのも疲れましたよ。って、先輩も、音もなく後ろに立つのはやめてください」

「暗殺術も乙女の嗜みですか」

「乙女の世界の乙女ですか」

「いざれにせよ、男の意見も聞かず、争つてばかりの女には魅力を感じないわよね。うん、そうよね」

「男の」から急に大きな声で言つベルタ。僕は何も言つてない。

「困ったことがあつたら、いつでもお姉さんに言つのよ」

囁くベルタ。いつも以上にたおやかな笑みを浮かべ、優雅に去つていぐ。あの行動、絶対に自分が面白がりたいだけだ。

「ショーン」

『ショーン・ヒルガ』

マリアとミドリが同時に僕に呼びかけた。

「『あなたはどうしたい?』」

ベルタが隠れて腹を抱えて笑つてゐるだりと僕は思つた。

16・戦乙女たち（後書き）

描てお話を聴んでいただき、あつがとうございました。
もしよろしければ、感想、『描きなどへだてこまか』。

僕は思った。

僕らの祖先が地球を旅立つて1000年余りが経っている。惑星連盟が現在のように各星系政府との間で連邦制をとることができたのも、宇宙軍が常備軍として整備されたのも、星系間移動・通信技術の進歩という技術的な側面と、星系同士での紛争にかかる戦費がそれこそ天文學的な金額に上る一方で、主に資源分配や経済的側面によつて星系単位で引き籠ることができないという事情に由来する。しばしば起つる星系政府間の紛争によつて星系政府がいくつかの星系政府間連合に統合されてきたことや、爆発的に増大する宇宙孤児対策が必要だつたことも背景として挙げられるだろう。やはり、そこには外敵の関与など一切ない。改めて考えて見るまでもなく、外敵はおとぎ話やゲームの中の存在であり、眞面目に議論することなどないのだ。連盟政府や軍の中枢にいる者は、今でも自分たちとは別の人類との交渉、あるいは交戦に対する危機感はないに違いない。画面の向こうの少女が敵と呼ぶとおり、かの人類とは、交渉の余地はないのだろうか。

そこまで考えて、この考えがあまりにも愚かしいことだと思ついたつた。一定の実力のない者が蹂躪されるというのは、人類の歴史で明らかだ。もちろん、実力というのは軍事力、経済力、技術力、国民性や政治体制を含めた文化力など総合的なものだが、侵略者を相手取る場合には、まず目に見える軍事力がどうしても必要となる。そうでなければ、交渉のテーブルすら用意できない。

ミドリによれば、我々の軍事力では侵略者に敵対することすら叶わないという。それは、フォーシバニア少将が、ミドリの仲間の艦

隊に、ほとんど損害を『えられなかつた』ことで証明されている。では、敵の力とはどれほどのものなのか。協力するのはやぶさかではないにしろ、情報がなければ、僕らが取りうる方法を検討すらできない。

「ミドリ様、」

『堅苦しごと。ミドリと呼べ』

「では、ミドリさん、私も自分が所屬している国、というか故郷と思つてゐる場所が蹂躪されると聞けば、微力ながらも協力しようと思つます。ただ、ミドリさんのことを信用していないわけではあります。ですが、その『敵』という奴は、どのような集団で、どれくらいの力を持つてゐるのか。そして、なぜミドリさんたちの敵になるのか。この辺りを教えていただかないと、答えを出せそうにありません」

結局、僕は率直に聞くことにした。

『ふむ……その辺りは道々教えるとしよう』

「道々？」

『そうだ。私は、そなたらとともに行こう』

「一緒に？惑星連盟に？」

『そうだ』

「なぜに？」

変な疑問語になつてしまつた。

『決まつておるう。それが手つ取り早いからだ。急がねばならんし、協力体制を築くにしろ、お互いのことを知る必要があるだろう。それに、私は我らと惑星連盟に関する全権をゆだねられておるからな。この程度のことは予測の……』

『いやいやいやいや。ちょっと待つてください』

『いや、待てぬな』

『いべもない。これまでの会話というわざかな情報だが、ミドリはこちらからの質問をすでにする人ではないはずだ。』

「話を聞いてください」

『時間があればそうしている。そもそも、お前たちの仲間がそなたらの搜索と現場検証のためにやつて来るのではないかな』

「つかりしていた。味方の艦隊が到着すれば、状況はややこしくなる。味方の艦隊からすれば、何が何だかもわからないこの戦況を後でどう説明すればいいのか。いや、最悪の場合、僕ら」と攻撃を受ける事態もあるかもしれない。それを避けられたとして、ミミのことを公にできないので、誰もが納得できる辯護の合ひ説明はできない。さらに、ミドリはこの場から逃走するしかなくなり、今、交渉のテーブルに上がっている話は破談になる。そうなれば、正体不明の強大な敵に対処するために、徒手空拳で準備をすることになるだろう。つまり、味方に追い詰められているのだ。まるで一か八かの賭けのように、十分な情報もないままに決断を迫られている。

「とりあえず、一緒に来ればいいじゃない」

「マリアが意外にもそんな風に答えた。

「…僕の懸念を知った上で、マリア先輩はそうおっしゃっているんでしょう。であれば、僕は、ミドリさんが同行することにあえて反対はしません。賭けのようなものですが、そっちの方が、最悪の事態は避けられそうですし。しかし、マリア先輩、こんなことを軍にどう説明するのですか？」

「ふふふ…そこは私に任せなさい」

マリアは、満面の笑みを浮かべた。マリアのファンの間では恒星ヴァレのような笑顔と言われていると聞いたことがある。これを聞いてから、僕は恒星ヴァレへの感謝の思いが消えうせてしまった。マリアがこのような顔をするときは、たいてい僕の神経と胃壁を削り取ることになるのだ。この人の恐ろしいところは、とも当然のように僕のフォロー込みで計画を立てることであり、僕は、その度に冷静に臨機応変に現実的に対処をするという苦行を求められる。しか

し、僕は、もはや運命に逆らうことあきらめかける自分がいるのを感じ、そのように感じたこと自体にテンションが下がる。

ああ、憂うつだ。たぶん決断の方向性としては悪くないのに、僕はため息をつかざるを得なかつた。

17・僕といつ宇宙孤児の憂鬱（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

1-8・帰還と旅立ち（前書き）

第一章は「」で一区切りです。

僕は、新居に帰ってきた。

もう一生分の神経を使つた。しかし、もう一生こんなに自分の頭と身体をコントロールすることはないだろ。マリアに付き合つてこんな目に遭う度に思うことを今日も想う。また、数日間は胃痛ともに過ごすことになるのだろう。

『//』、『//』

『なあに？マスター』

ああ、癒しの声だ。しかも//はちょっと上機嫌だ。

あの後、道々、ミドリから敵のことを聞き、こちらのことを//下//と//を語るには時間が足りなかつたが。こちらから打ち明けたことの中には、当然、僕の出自と使つた力のことが含まれた。僕の力といつても、それは//そのものだ。だから、ミドリに//を「紹介」したのだ。意外にも、二人の少女の話は弾んだようだ（僕にはどのような言語でどんなやり取りがあったのか全く分からなかつた）、それから//はすぐ上機嫌だ。

『機嫌がいいね、//』

『うん！だつて、今回マスターのお役に立てたし、これからも役に立てるもん！』

ああ、なんていい娘に育つたのだろうか。やはり宇宙空間での非行化は幻想だったのだ。戦いは人の心を荒ませるというのも納得できる。まだ10歳の少女に戦場はきつかったのだ。そうに違いない。

『あの年増からマスターを守る方法もミドリから教えてもらつたし』

『な、何聞いてんの？！』

つていうか、僕の//に何を教えてんだ。あの宇宙人め。

「ミドリには清らかに育つてもらいたいのだ。しばしばアンドリの接触を禁止しようと心に固く誓った。

「宇宙人で悪かつたな」

背後から別の少女の声。ミドリに比べて少し低めの透き通るような声だ。憮然とした表情を浮かべているのが見なくても分かる。ミドリが入ってきたのだ。

「なるほど、お兄ちゃんは、私の声がお気に入りか？妹の声に欲情するとは、とんだヘンタイだな」

誤解のないように言つておくが、好きでミドリと兄妹役を演じているわけではない。決して「お兄ちゃん」なんて呼ばれて喜んでるわけじゃないからね！といつのは本当に冗談で、マリアが用意した設定のせいなのだ。その後、ミドリを我が艦に移し、マリアは驚愕の設定を告げたのだ。

「ミドリさん、ここではその設定はやめてくれませんか

「断る」

「なぜに？」

また変な疑問語が口をついて出る。

「ショーンは、この設定でないと私にため口をきかぬだろ？。それにこの設定を気に入つてある。『半数を失つた我が艦隊は逃走し、逃げ遅れた艦からそなたらの艦が救難信号を受け、見捨てるのも軍規に反するため、救助に向かつた。その艦内には、宇宙海賊に攫われた宇宙孤児と思われる少女がいた。少女は、駆け付け救助してくれたショーンが生き別れの兄であると言い張り、兄であることを否定しても聞き入れない。症状が安定しない失語症もみられ、精神的ショックが大きいと推測される。』ふむ、なかなか面白い設定ではないか」

「もういいですよ。やつている「ちばひや」ものでしたよ。話を戻しましょう。知りあって間もない人で、しかも他国のお偉いさんにため口をきけるほどの無謀さは僕にはないんですよ

「では、その他のお偉いさんの機嫌を損ねないために、この兄妹設定を貫くか、そのバカ丁寧な口調をやめるか、どちらかを選ばせてやろう」

「なんて悪辣な…といつまじのこともないので、僕は後者を選んだ。」

「わかったよ。…ミドリ」

「うむ、それでよい。ともあれ、これから長い間になると思うが、世話をなる。」

「こちらこそ、色々迷惑かけるけどよろしく」

ミドリは、初めて二ヶコリと笑った。春風が吹いたかのよつなさわやかな笑顔だった。

その数時間前、校長室を出た途端、マリア、ベルタ、ミドリは爆笑した。

「ああ、ショーンは、本当に最高ね」

マリアが言う。ほかの二人は笑いがおさまっていない。

「何がですか、全く。先輩たちと一緒にいると、この世の恥辱をすべて味わうことになるのではないかと思いまよ」

「あら、私は辱めようなんて思っていないわよ。いつも冷静沈着なショーンが、どんな場面で慌てふためくかを試したいだけよ」

「ほんとに悪趣味ですね」

「私にとつてはほめ言葉よ」

そう、僕らは帰着時身体検査を受け、その後直属の上司となる宇宙軍大학교の校長に帰還を報告し、戦闘の顛末について事情聴取を受けていたのだ。マリアたちが笑っているのは、身体検査時のことである。ミドリは完ぺきな演技をしていた。僕を「お兄ちゃん」と呼び、精神的ショックで退行したかのように振舞っていた。ミドリ

は、僕から離されようとすると泣き叫び、手をつけられない駄々っ子だった。それがいけなかつたのだ。設定を作つたマリアも悪いし、演技を教えたミミもやりすぎたし、ミドリも悪乗りしすぎたのだ。そこにベルタが状況をかきまわす。

そして、こんな事態が起きた。

「このままでは検査できませんので、ヒルガさんも一緒に検査室に入つていただけます?」

看護師が僕に対して告げる。絶対に離すまいと僕の軍服の袖をぎゅっと握るミドリ。

「ええ? さすがにまずいでしょ?」

「お兄ちゃん、私と一緒にいるのやなの?」

純真無垢な瞳。//のホログラミング・ファイギュアを見ているようだ。

「嫌じやないけど、大人の男性はここと一緒にには入れないんだよ」ここで行う検査は、機械検査である。つまり、服を脱がなければいけないのだ。下着も。

ミドリは、本当に演技なのか、いたずら心からやつてているのか判別がつかなかつた。

「いや! いや! いや!」

叫んで腕を振り回す15~16歳の少女。痛い痛い。看護師さんに当たつてしまつた。看護師さんは笑顔?で僕を見る。「つべこべ言わずに、さつさと入れや! このクサレ×××野郎が!」と、一言も發していない笑顔?の看護師さんからそんな声が聞こえた。

「はあ……じゃあ行くよ、//」

「はーー」

僕は、とりあえずこの部屋では何も見ないよつにじよつと覚悟を決めて、検査室(女性用)と書かれたドアの前に立ち、わきにあるボタンを押した。ドアが開きかけた瞬間、聞こえてきた声に僕はまず

いと思い、その場から逃げだそうとした。しかし、それは叶わなかつた。後ろからすごい衝撃が来たのだ。看護師の足蹠だつた。僕は、つんのめり、たたらを踏んで部屋に入つてしまつたのだ、マリアとベルタが待機する待合室に。ちなみに、二人とも全裸だつた。後方で閉まるドア。二人と目が合う。頭から血の気が引く。これから訪れる悲劇が頭を過ぎり、美しいとか、男性としての興奮とか、そんなことはこれっぽっちも浮かばなかつた。

「あら、覗きなんておイタがすぎますわね」とベルタ。

「ほんとに、もうお嫁にいけないわ。責任を取つてもらわないと。そう言えば、結婚するまで男性に肌をさらしてはいけないっていうのがパパの口癖だつたわ」とマリア。

じゃあ、ちゃんと隠してください。ていうか、そんなことをあのダンディで知的な人が言うわけがない。くそ、キャーとか言わないところをみると、こいつら分かつてやがつたな。相手が全然恥ずかしがつていないとこっちが恥ずかしくなつてくる。血の気の引いた頭に再び血が上る。僕は思わず後ろを向いた。そこには、着換え始めるミドリがいた。

「何で、脱ぎ始めてはるんですかー！」

僕は、へんな丁寧語で絶叫した。

その後のことはじ想像にお任せする。彼女らは責任と称して、もうお婿にいけないようなことを強要したのだとだけ僕は言い残しておきたい。

検査室では主に僕の貞操の危機があつたが、事情聴取は特に問題なかつた。

軽戦闘艦のレコードを設定に合つように変えたのだ。ちょうど僕らがミドリの艦を砲撃した辺りからである。もちろん、ばれれば軍刑務所行きだらうが、ミミに改ざん跡が残らないようチェックもしてもらつたので、専門家であつても見破られない自信がある。これも大義のためと自分に言い訳した。僕らが報告するときには、そのデータが既に校長の手元にあるはずだ。

マリアから報告がなされる。僕は時折まことしやかにうなずき、オペレーターとして補足すべきところを補足する。僕の隣にはミドリが座つているといふか、僕の右手で遊んでいる。ミドリさん、手のひらを爪でひつかくのはやめて。冷静に報告しているところで、高い声とか出ちやうから。

「ミドリが同席したことで、ミドリ救出エピソードも、具体的な事実として校長には映つた様子だつた。そして、校長は僕に対して「できる限りのことをしてあげなさい」と言つた。確かに、僕が校長の立場でも、退行してしまつほどに精神的に不安定な少女に同情を寄せるだらう。そんな人間的できた校長の良心を利用した鬼畜がいる。

「私が無理を言つて、今回の実習にヒルガくんを連れて行つてしまつたんです。オペレーターとして適切な人材がいなかつたので。ただ、ヒルガくんがいなければ、今回のミッションは達成することができませんでした。彼の優秀な情報処理があつたからこそそれを作戦だつたと考えます。しかし、無重力下での身体能力に長けたヒルガくんにこの子の救出をお願いしてしまいました。この事態は私の責任です。」

殊勝に反省の弁を述べるマリア。

「君もずいぶん成長したようだね」

「騙される人の良い校長。

「今、この子をヒルガくんから離せば、この子はどうなつてしまつ

のか心配ですか。」

追い打ちをかけるベルタ。

「しかし、退行しているとはいって、15～16歳の少女をヒルガクさんの部屋に住まわせるわけにはまいりません。」

マリアが続く。

「そうだねえ。一時的にどこかで一緒に暮らせるところがあればいいねえ。ヒルガくんもそう思うよねえ」

このおじいちゃんは、どこまで人が良いのか。一線を退いたとはいって、軍人なのに。僕が間違いを起こす危険性があることさえ想像の範囲外だとは。もちろん、僕は間違いなんか起こさないけどね！

「ええ、少なくとも責任は果たさないと思っております」

僕は無難な答えを選ぶ。

「あ、そうだ！ 良い方法がありましたわ。校長の許可さえいただければ」

マリアは、とんでもない提案をしたのだ。大学とは言え、軍学校で受け入れられるはずもなかつた。

「それはいい。すぐに許可を出そう」

しかし、その、軍大학교校舎近くにあるマリアの父の第2官舎にて、僕とミドリ、そして一人の監視役としてマリアとベルタが住むという提案はあっさりと受け入れられた。ふと横のミドリを見ると、黒いはずのその瞳が緑色に光っていた。

僕は、寮から持ってきた荷物を開封しながらミドリに尋ねた。

「ミドリ、さつき校長に対してもう何かしただろ？

「ああ、あの老人の同情心を前面に出し思考を鈍らせただけだ」

「ミドリたちは、具体的な思考に干渉できるのか？」

「いや、原理はショーンのAI、名前はミミか。ミミが私の艦隊を

乗つ取つた方法と同じだ。」

「ミドリに同情したときの電磁パルスを読み取つて、それと同質のパルスを放つて共鳴させたということか」

「そうだ。しかし、ショーンは応用力があるな」

「これでも研究者志望なんでね」

「ほづ、ショーンは指揮官志望ではないのか」

「ああ。何度も言つけど、作戦立案は僕の能力じゃなくてミドリの能力なんだよ」

「しかし、作戦を立案させ、取捨選択し、修正を加えるのは将の仕事だ。将は決定者だ。だからこそ、様々なデータを読み取り、即時に解釈する能力がいる。やはり、ショーンは、指揮官の方が向いているような気がするがな」

「まあ、こいつは、何でもやるつもりだけどね」

ミドリが戦場で見せた情報処理能力の著しい向上を目の当たりにして何よりミドリが嬉々として戦いに臨む姿を見せたことで、僕は、ミドリの能力を發揮させてあげたいという気持ちになつていていたのだ。

荷物の片づけをしながら一人で雑談していると、玄関のドアが開く。マリアとベルタだ。

「あら、二人とも仲良いですね」

ベルタが煽る。

「ショーン、ロリコンでシスコンだという噂を流されたくないでしょ？」

あの看護師の数倍怖い笑顔でマリアが言つた。僕は何度もうなづいた。

マリアはすぐに怖い笑顔を、全てをいつくしむような微笑みに戻

した。そして、ベルタ、僕、ミドリをそれぞれ見てマリアは告げた。

「じゃあ、今この場所から私たちの戦いを始めるわよー。」

僕は、そのとおり、マリアの笑顔が恒星ヴァレに例えられるのが初めて納得できた。

1-8・帰還と旅立ち（後書き）

拙いお話を読んでいただきましてありがとうございます。

評価してくださった方、お気に入り登録をしてくださった方、心より御礼申し上げます。

幕間1 お楽しみと言わされて楽しめたことなどなかつた

「食事に付き合つてもううわ」

あのとき、僕が伏兵をミミに乗つ取らせる作戦を許可してもらつたときに、交換条件としてマリアが提示したのがこれだつた。僕はいつも断りもせず食堂の僕の前の席を陣取り、友人が僕の前で食べていると、穴が開くんじやないかというくらいの鋭い眼光で友人を睨みつけ、友人がそそくさと立ち去ると、何もなかつたようにそこに座るようなマリアが、食事に付き合つてもらうと懇々明言した意味を僕は深く考えていなかつた。

僕は、よく鈍感などと言われる。女性の気持ちに疎いのは確かではあるが、マリアが女性として僕にアプローチしてきているのはさすがに気付いている。半分は僕をからかう気持ちがあるのであらうけど、それも彼女の「お気に入り」に対する愛情表現なのだろうと思う。ただ、物事はそんなに簡単ではないのだ。

宇宙孤児であるといふことは複雑だ。僕はその複雑さを、諦めて受け入れながら、一つ一つ検討することで思考力が鍛えられてきたのだという自負がある。もちろん、独りでウジウジ考えるより、他人とふれあい、ぶつかりながら問題を乗り越えていく方が精神的には成熟するだらうことも知つてゐる。でも、それに気付いていることと、できるということは全く違うのだ。マリアが僕にアプローチをかけければかけるほど、僕の宇宙孤児性みたいなものが強烈に意識される。そのたびに、僕はその痛みから逃げる。逃げても逃げても、逃げられないのに。

宇宙で人は長く生きられない。近恒星間航行手段が確立し、星系を単位とする国家が形成され始めてもなお、これが人類のテーゼだつた。惑星移住世代にとつては、宇宙で生まれた子孫が生き残らないようになすべきだとの考えが大半を占めた。これのために、航行者に対する様々な手段が試みられ、中には非人道的なものもあつたと言われる。それでも、航行技術が大幅に進歩し、内乱や戦争が宇宙空間に拡大する時代を迎えると、宇宙孤児が生まれるようになつた。

宇宙空間に長期滞在することで子をなし、宇宙空間で出産する事例が多数見られるようになつたのだ。宇宙孤児の不運は、親がずっと宇宙空間で生活することは心身の健康上不可能であり、宇宙で生まれた子が地上で生きられるようになる技術も未発達なことだつた。「親が地上に帰つても、宇宙で生まれた子が幸せに育つ環境を」という親たちの願いが叶つて、というよりは、退役軍人会と人権保護団体との極めてまれな共闘により、異例の早さで宇宙孤児保護条約が当時の星系国家間の折衝機関であつた惑星連盟において採択された。この2つの相容れない団体が共闘したのには訳がある。宇宙孤児には、2つの大きな特徴があつた。一つは、宇宙空間での生活維持能力に長けていること、もう一つが、なぜか目鼻立ちの整つた子が多く生まれるということだつた。この2つの特徴から、宇宙孤児の人身売買が盛んに行われたのである。退役軍人会にとつては、宇宙孤児が主に軍人の子であるという感情的な問題だけでなく、宇宙空間における大きな戦力として宇宙孤児に期待し、人権保護団体にとっては、奴隸や人身売買は唾棄すべきものだつた。

こうして、宇宙孤児には連盟の保護政策が手厚く施されることになつた。当然、宇宙孤児は軍人になるもの、商船団で働くものが大

半を占め、連盟の維持発展に大きく貢献した。宇宙孤児が世代を経るごとに、地上で生活できるような支援技術や宇宙孤児自身が里親になる制度などができるがつていった。しかし、長年にわたってタブーだった存在であることに加え、国を持たぬ者である宇宙孤児は、謂われなき差別を受けることが多かつた。それは根深く、宇宙孤児は、今も惑星出身者からは有形無形の侮蔑の眼差しを受ける。

僕がリビングでそんな考え方をしていくと、2階からマリアが下りてきた。いつもデーターと称して僕を荷物持ちに連れていくときの、ファンクラブの奴らが見たら卒倒するような露出の高い格好ではなく、シックなワンピースを着ていた。何といつか、何を着ても似合う人つているよなと感心する。

「清楚な格好もお似合いですね、マリア先輩」

「あら、ショーンはこうこう格好が好きなの？」

「ええ、好きですね。好きといつても僕が着るわけではありませんからね」

「そうね、考えておくわ

どっちを考えてこらのだろうか。自分が着ることか、僕に着せることか。

「何を着ても、この人のためにあつらえたものという感じがするんですね、マリア先輩は」

「あ、ありがと。やけに褒めるじゃない。今日は」

「そんなことありませんよ。それにしても、僕もちゃんとした格好をじろじろいつので、スーツを着ましたけど、ビートルの行くのでじゅう？」

「それは、着いてのお楽しみね

「はあ、その答えを聞くたびに、よからぬ想像を掻き立てられるよ

うになりましたよ

「じゃあ、データに行きましょ。ちなみに今日は、マルチグラス ハードケース眼鏡も疎通機器も禁止ね」

「・・・分かりました。」

///の機嫌が悪くなりそうだが、仕方ない。今度、///のお願いを聞くとしよう。

マリアの運転する車でしばらく走る。この街は、軍関係施設が集中している。都会に出るこは、地下を走ることになる。しかし、マリアは、地道の入口には向かわず、そのまま軍施設の中心に車を走らせる。なんかいやな予感がする。マリアもいたさか緊張している様子で、今日は口数が少ない。

「着いたわよ

「こりつて」

「ええ、宇宙軍の統合作戦本部ビルよ

「食事では?」

「そのとおりよ

「こりで?」

「さう

「誰と?」

「・・・父よ」

はい? あなたの父って、参謀総長じゃん! 何で僕を連れて来るの?!

「父が、会いたいらしいのよ

「しばらく会つてないんですか?」

「いや、あなたに、よ

「ははは?」

もつぢうでもなーれという気持ちが乾いた笑いになつた。僕は、どうか今日は恥辱を受けませんよ! ことだけ、恒星ヴァレに祈つた。

幕間2 戦乙女の揺り籃

駐車場に車を滑り込ませると、憲兵と思われる兵士が入口に立つていて。マリアと一、三言葉を交わすと、道を開けた。車は、一般駐車スペースではなく、地下に下りていく。

「今日は、VIP用から入る必要があるらしいわね」

「先輩は、いつもではないんですか？」

「こんなところに頻繁に来ないわ。ここに来たのは2回目よ。その時は一般入口からだつたし。公私混同は趣味じゃないのよ、私も父もね」

「はあ。そんな人が、わざわざVIP用から来いといつことは、何かを警戒しているんですかね」

「マスコミでしょ」

「マスコミ？ スキャンダルを狙われてるんですか、先輩」

「何を言つているのよ。狙われてるのは、あなたよ」

呆れたような口調でマリアが言つ。

「はい？？」

なぜ僕が狙われないといけないのか。僕のプライベートを覗き見て喜ぶ奴なんか、いるわけないだろ。

「あなたのそういうところ、つまり、自己評価を気にしないところは、長所もあるけど、時に短所もあるわね」

「それは、そうでなんじょうけど。本当に、僕には覚えがないのですが」

「…まあ、じきに分かるわよ」

僕らが駐車場に入ると、後方のシャッターが閉まる。駐車場には、高級車の展示場かというほどたくさんの中級車が駐車されている。ナンバーも、特殊ナンバーが多い。強面の運転手が車内待機してい

る車も多い。さすが、VIP用駐車場と云ふとか。

Hレベーターで最上階近くに上がる。おそらく、一般的のHレベーターから、行けないようになつてゐる階なのだろう。あつとう間に到着するのに、ほとんどストレスを感じない。惑星出身者には違つかもしれないが。

扉が開いた。そこには、ストレートの長い黒髪、目鼻立ちのはつきりした美人が立つてゐた。宇宙孤児に独特の黒目だ。くすんだ紅色のスースを着ていて、背は低いがマリアに負けないくらいのプロポーションと一目でわかる。年齢は、30代前半といったところか。参謀総長の秘書なのだろうか？

「ようこそ、若き英雄さん。そして、久しぶりね、私のマリア」
穏やかな微笑みを浮かべて僕に告げ、そしてマリアに告げる。私の？

「久しぶり。元気そうで安心したわ、ママ」

僕は「ママ？」と声を上げそうになるのを辛つじじて、「いや、差し出された手を握る。

「あ、初めてまして。私は、ショーン・ヒルガと申します。宇宙大学校工廠科の3年生です」

「初めてまして。ソフィア・フォーゲルトです。惑星連盟評議会議員」

「よ

「そして、私の母親よ」
マリアが付け加える。

「娘が迷惑をかけていて、ごめんなさいね」

「はい！あ、いえ、先輩には様々お世話になつておりますして

爆笑するソフィア。笑い声は、マリアに似てゐるかもしれない。

「マリア、あなたやつぱり迷惑をかけているのね。ショーン君、ごめんなさいね、この子まだまだ人に対する不器用なところがあるから。悪気はないのよ。」

「いえ。とんでもない」

「悪気はない」のところに反論した形になる。考えてみれば、案外間違つてはいるかもしれない。

「もう、そんなこと言つてる場合じゃないでしょ。パパの時間がなくなるわよ」

「そりだつたわね。案内するわ」

ソフィアとマリアの会話を聞き流しながら、二人の後ろを歩く。マリアの父母は離婚しているのではなかつたか？一緒に会食？一体何のために？自宅でないのはどうして？僕が呼ばれた理由は？考えても分からぬ疑問が浮かぶ。僕は、思考を放棄する。理由はすぐには分かるだろ？

部屋の前につく。ソフィアはノックもせずに扉を開けた。奥に座つてゐるのが参謀総長クリスティアン・カルマンだろ？ん？なんかすごい厳かな格好をしている。式典服？ソフィアがツカツカと足早に歩み寄り、ちょうど立とつとしたカルマンを無理やり立たせ、奥の扉へ押しやり、自分も入つて行つた。かすかに声が聞こえる。「だつて、娘が男を連れ…」「いいから着換えなさい」「でも…」何かを叩いた音。

「じめんなさいね。少し待つていてもらえる？マリア、お茶をお出ししてね」

ソフィアが顔だけを出して言い、また扉が閉まつた。マリアをみると、肩をすくめた。じ覽のとおりよといふことか。

待つこと10分。ようやく、カルマンが出てくる。今度は、スーツに身を包んでいる。線は細いが長身によく似合つ。軍人ではなくどこかの大学教授といわれる方が似合つている。でも、よく見ると目尻に涙を浮かべている。ちょうど緊張がほぐれる。

「よつこわ。ショーン・ヒルガくん」

カルマンは、少しばつが悪そうな笑顔で手を差し出す。

「いえ、お招きいただきありがとうございました。参謀総長

両手で手を握り返し、挨拶をする。

「お見苦しいところを見せかけたわね」とソフィア。

「いえ、仲睦まじいところを言つんだと思いました

「なかなか、本質を穿つてるな」とカルマン。

ソフィアがカルマンを睨み、カルマンはショーンとなる。参謀総長のイメージが、父親の威儀が、崩れしていく。同情の気持ちが生まれてくる。

「パパ、時間無いんでしょう」とマリア。

「ああ、さっそく食事をしながら話をしよう

カルマンが気を取り直して言つた。

出された食事はスタンダードなものだつた。特に作法を気にする必要がない。しかし、カルマンはパンの肩をぽろぽろこじほしたり、ステーキが切れにくかつたらしく、ソースを飛ばしたりと、まるで子どものようにソフィアに世話をされていた。マリアはそのたびに肩をすくめる。

食事の間は、世間話やマリアの生活ぶりについての話題を中心だつた。僕には昔の記憶になつていて、家族の会話についてはこういうものだつたよつた気がする。僕は、後から文句を言われないようこ、マリアをほめたたえておいた。帰つた後じつと疲れるような気がする。食事が一段落し、コーヒーが出される。

そして、カルマンはおもむり話を切り出した。

「ヒルガくん。申し訳ないが、君には英雄になつてもらわねばなら

本当に申し訳なさそうに僕に告げた。
ない」

幕間2 戦乙女の搖り籠（後書き）

拙こお話を読んでいただき、あつがとうござります。

カルマンは、その一言を言つたきり押し黙つた。

あれ？僕が何か反応しないといけないのか？

カルマンを見ると、もつり役割を終えたような顔をしている。

「あなた、それだけじゃ何も分からないわ。いつも言つてゐるでしょう。言葉を尽さないと理解してもらえないって。」

「パパは相変わらず、伝えるのが下手よね。キース副参謀長の苦労がしのばれるわ」

妻と娘からさんざんに言われるカルマン。何かすうくかわいそうに思えてくる。

「参謀総長がおつしやる英雄の意味と、申し訳ないとおつしやつた意味を教えていただけますか？」

思わず助け船を出してしまつた僕。

「ああ。今回の事件では、我が軍に少なからぬ犠牲が出てしまつた。艦隊戦の経験豊富なフォーツバニア少将を当てたにもかかわらず。」

「なるほど、負け戦による世論の非難を逸らすために英雄が必要だ

とおつしやりたいわけですね」

「まさにそのとおりだ」

人懐っこい笑顔を浮かべるカルマン。ずいぶんイメージと違つ。

「失礼ながら、参謀総長。負け戦と言つても一倍の敵の奇襲を受けながら、艦艇損傷率が三割弱で済んだと聞いています。それであれば、犠牲を最小限にとどめたフォーツバニア少将の指揮能力の高さをアピールすれば足りるのではないかでしょうか。帰還した兵たちの証言も得られるでしょう」

「ああ、確かにそうなんだが、今回はやつもこかなくてね」

「はあ。問題はどの辺にあるのでしょうか？」

カルマンは、助けを求めるようにソフィアを見る。

「シヨーン君。今回の敗戦だけど、敵は何と呼ばれていたか知ってるわよね？」

ソフィアが代わって問いかける。

「はい。『宇宙海賊』ですね。：ああ、なるほど。ネーミングが先行したせいで、話がややこしくなつていてのことですね。」

『宇宙海賊』と思っていたら、相當に連度の高い艦隊を持った敵でしたというのが事実だが、事実を知らなければ、正規軍が海賊ごとに負けたということになるわけだ。いくらフォーツバニア少将の指揮能力の高さをアピールしても下位の敵に負けたのであれば役に立たない。じゃあ、外敵だったと公表すればいいのかというと、敵の正体は全く不明の現状である。それはそれで、なかなか微妙な問題となる。

「そのとおりよ。でも、負け戦の中で二つだけ明るいニュースがかった

「商船団の帰還と人質の救出ですね」

ソフィアは微笑む。

「それに、明日にはフォーツバニア艦隊も帰還するわ。軍に関する報道は一定程度は統制できるけど、悪い情報ほど漏れる。マスコミはもうある程度情報をキャッチしているはずだし、負け戦を隠し通すことはできない。情報を無理やり統制してゆがんだ形で情報が漏れて、微妙な問題を引き起こす最悪の情報まで漏れてしまつなら本末転倒でしょ。だから、マスコミには十分に情報を流す必要があるの。」

「なるほど。慧眼だと考えます。今回の場合は、く『宇宙海賊』と呼んでいたものが正体不明の外敵だったということ、が微妙な問題を引き起こす最悪の情報というわけですね」

「ええ。これについては高度な政治的処理が必要な問題なの。だから、一時に宇宙軍の実力に疑問を呈されたとしても、宇宙海賊ご

ときには負けたということにしなければならない」

「だからこそ、美談が必要というわけですね。ただ、マリア先輩の方が、マスコミ受けも良いし、美談にふさわしいのでは？」

「もちろん、マリアを中心とした宇宙大学校生チームの活躍という話になるわ。ただ、ショーン君以外の3人は、もうすぐ任官するからマスコミの標的にならずに済む。でも、あなたはあと1年学生を続けなければいけない。あなたは、身分は軍に所属しているけど、軍人よりもまだ行動の自由がある。だから、マスコミの標的になるのはあなたよ。宇宙孤児の少女を救った秀麗な宇宙孤児。一般受けしそうでしょ」

「はあ、そういうことですか…」

「もちろん、マスコミ対応は軍が全面的に引き受ける。苦情も要望もできるだけ聞きたいと思っている。ただ、マスコミに顔が知られるということは、たいへんなことだ。今後、軍人としての人生に多大な苦労をかけることになる。しかも…」

カルマンが何を言い淀んだのか、簡単に予測できた。

「…しかも僕は宇宙孤児ですからね」

「ああ、そうだ。軍隊という組織は、人間の醜い部分が投影される。特に嫉妬という奴は、どうにも厄介なものだ。ただでさえ、差別意識の抜けきれない輩が大勢いる中で、君をそいつらの嫉妬の対象にしてしまうことになると思うと申し訳ないのだ。報告を聞いているが、君がいなければおそらく今回娘は帰つてこなかつただろう。恩に報いるどころか、仇で返してしまうことになりかねない」

カルマンは、沈痛な面持ちで語る。僕は、カルマンが軍人としては珍しい感性の持ち主なのだと素直に感心する。本来、軍の上層部であれば、英雄にしてやるんだからありがたく思えと言つてもいいはずである。この辺りが、この人の指揮官としての魅力なのかも知れないと思つた。

「私なんかを心配していただけてありがとうございます。私にでき

ることは、「えられた環境でやれることをやるだけです。英雄役がうまく務まるかどうかは自信ありませんので、失望したという苦情がきてても知りませんよ」

僕は努めて明るく言った。

今回の実地訓練に参加するまでは、任官後にそんなややこしい事態になれば退役してしつぽを巻いて逃げることもできたのだが、ミドリと関わり、近い将来の脅威を知ってしまった手前そうもいかなくなってしまった。だから、何があつても自分がやるべきことはやらなければいけない。僕はそんな思いを抱くようになっていた。

「君は大人だな。私が君の年齢のときには、そんなことは思いもできなかつたに違いない。…そうだ、現時点で何か望みがあつたら言ってくれ。できる限りのことはしたい」

「…では、お一人のお時間をもう少しいただけますか？」

「ああ。別に構わないが」

カルマンは、ソフィアを見やり、一人ともうなづく。僕はマリアに目配せをする。マリアは意図を察してくれたのか大きく頷いた。

僕は、ひとつ深呼吸をしてこう切り出した。

「参謀総長、フォーゲルト先生、今回の敵の正体をお知りになりましたか？」

幕間3 良将の器（後書き）

拙こお話を聴んでいただき、あつがとうござります。

「そりゃあ、知れるものなら知りたいね
カルマンは、とても楽しいことを見つけたような満面の笑顔でこち
らを見る。

「知れば、お二人を抜き差しならぬ立場にたたてしまふことに
なりますが、それでも、でしょうか？」

僕はできる限り力を込めて言う。

「・・・覚悟が必要なわけね。それも相当の」とソフィア。

「ええ、私のようななんの立場もない若造が、そんな重大な秘密を
握っているとは考えられないと思います。ただ、私はあのとき現場
にいました。商船団が去った後の戦場に。…私もこれを間違った人
に伝えると、自分と大切な人たちの身の安全を失います。眞実は劇
薬と申しますが、これはどびつきりです」

二人は、しばし黙考する。

「娘もそれを共有しているということだな？」

「ええ」

「場合によつては、墓場まで持つていくことになるな」とカルマン。
「それですめばいいけど、たぶんそんな簡単ではなそうね」とソフ
ィア。

「おそらくは。最悪、お一人は僕を始末しないといけなくなります」

ガタッと音がして、横を見るとマリアが立ち上がりついた。僕は、
大丈夫との思いを込めて、マリアに笑顔を向ける。マリアが座り直
す。

「分かった。聞かせてもらおう」「カルマンはそう言ってうなずく。ソフィアもうなずいた。

「これを『』覗ください。あと、『』自分のP.A.Iの仮想ディスプレイも『』用意ください」

僕は、腕に巻いたA.I端末を操作する。///の視覚記憶を再生した。

「以上が、今回の全貌です。」

僕はそう告げた。再生が終わっても、一人は押し黙っていた。

「…いくつか質問してもいいかい」

カルマンは、ようやく口を開いた。

「もちろんです」

「まず、その君の能力について教えてくれないか。敵艦隊の乗っ取りにしろ、敵指揮官との交信にしろ、にわかには信じがたいことをしている。今の映像にしたつて、同時に膨大な資料が私の仮想ディスプレイには表示されていた。一体、どうなつているんだい?」「ええ。ただ、私が特別な能力を持つているわけではありません。

それらは全て私が特殊なP.A.Iを持つているということに過ぎます。少し説明が長くなりますが、構いませんか?」
カルマンはうなずく。

僕は、自分の出自について話し始めた。///のことを語ることには、避けられないからだ。

「これを『』覗ください」

ディスプレイに文字列が表示される。

V・C・1032 出生

1044 ミレイユE卒業

1050 ミレイユH卒業

同年 ヒルガ夫妻が、事故により死亡

1051 宇宙大学校入学

何の変哲もない僕の経歴だ。

「私の経歴です。IDチップに入力されているものです。これに少し加えます」

V・C・1032? 出生（詳細不明）

1040 ミレイユ星系で漂流中の

所属不明の艦にて発見。
保護される

同年 ヒルガ夫妻により里親申請

1044 ミレイユE卒業

1050 ミレイユH卒業

同年 ヒルガ夫妻が、事故により死亡

1051 宇宙大学校入学

「こんなことがありうるのか？」

「ええ。養父母の話、生前の日記、艦船レコードを照合した結果です。つまり、私は、出生から約8年間、どこでどう暮らしていたのか、どうして宇宙空間を漂流していたのか不明です。そして、実父母の名も、自身の名も分かりません。しかし、宇宙孤児にはこのようないかがいのケースもないわけではありません。」

「ああ、確かにそうだが、ここまで不明なのはめったにないだろう」

「いえ、このようなケースの場合、その宇宙孤児は社会の闇に消え

てしまつことが多いのでしょう。幸い、私は闇商人などではなく、善良な船乗り夫婦に拾われました。その意味では珍しいケースなかもしれません。」

「なるほどな。…今でも、宇宙孤児を売買する輩がいるのは事実だらう。続けてくれ。」

「はい。私がヒルガ夫妻に拾われた時、私が乗つていた艦はボロボロで、辛うじて私の生命維持ができるだけの状態だつたそうです。ヒルガ夫妻が保護したときから、既に私の腕には、この端末がついていました。しかし、ヒルガ夫妻が、起動しようとしてもこのP A I端末は反応しなかつた。ただ、唯一、漂流していた艦から持ち出せたものだからということで、実父母の形見としてヒルガ夫妻は、これをそのままにしました。」

僕の記憶がはつきりするのは、保護された後からである。その以前のことは闇の中に消えている。いや、微かに覚えていることがあるが、しつかりとした像を結ばないのだ。

「そして、10歳の時、私は偶然この端末を起動しました。いや、何度も同じように起動してもそれまでできなかつたのが、その日に限つて起動したのです。しかし、起動したP A Iは『白紙』でした。」

「白紙というのはどういふことなの?」

ソフィアが問いかける。

「何のソフトウェアも入つていらないA Iだと思つてもらえばいいかと思います。ホログラミング・フィギュアはあるか、何の機能もなかつたのです。子どものことですから、起動できただけで嬉しくて、仮想ディスプレイを表示してずっと眺めるのが日課になりました。しかし、しばらく挨拶のように朝に夕に起動していると、『おはよう』とか『おやすみ』を言つと、音と画面の揺れが返つてくるようになりました。最初は間違えかと思いましたが、日増しに音や

画面の揺れが規則性を帯びていきました。遊び代わりに、様々な言葉を試したり、文字を記憶させようとしたり、子どもながらに様々な実験を試みました。するとAIの方も、少しずつ反応の複雑性を増していました。

「まるで赤ん坊を育てるみたいね」とソフィア

「そのとおりだったと思います。私自身もそんな風に感じていて、13歳の時、ソフトウェアを作つてみようと思いました。ホログラミング・フィギュアをどうしても設定したかったのです。しかし、どうしてもうまくいかない。試行錯誤するうちに、PAPI 자체のプログラミング言語の問題に行きつきました。

「13歳で、よくそこまで考えついたわね」

「今から思えば、確かにそうですね、ただ、自分の欠落を埋める試みだったような気がします。過去の欠落を、未知の機械を動かすことで埋め合わせる、そんな執念だったのだと思います」

当時の自分を客観的に評価すれば、このようなことだったのだと僕は思つ。もちろん、養父母にはこゝへ感謝してもしきれない。養父母は全てを与えて、僕を育ててくれた。ただ、それでも心の穴は埋まらなかつたのだ。だからこそ、ミミにかかわってきたことで、僕は救われたと思つ。少なくとも多感な時期に自棄にならずに済んだのだから。

「それで、結局プログラミング言語はどのようなものだったんだ?」

とカルマン。

「移民船ヴァレンシアのAIを組成している言語でした。惑星到着世代は、その言語を使用して居住惑星化を図る機械の電子頭脳を組み上げています。だから、言語自体は、古い文献を漁れば見つかるものでした。幸い、私の起動したAI用のソフトウェアは開発可能だつたわけです。私は、まず我々が使う言語を、疎通言語に設定することから始めました。しかし、一から組み上げるプログラミング

はほとんどそれしかやっていません。正確にいえば、それしかする必要がなかつたのです。」

「どういづいと?」とソフィア。

「P.A.I.をミミと名付けましたが、ミミはいわば自己成長機能が備わつていたのです。本来A.I.といふのは、命令を「えなくとも、環境刺激を読み取りそれに自動的に対応するために開発されたものなので、機械が自分で考えて自分で行動することが可能です。しかし、それは、人間が設定した領域に限定されるものです。一方、ミミはそうではありませんでした。自分で積極的に興味の分野を広げ、人と対話しながら、様々なことを学習していくました。…まるで人間のように」

「どういう原理なんだいづな?」とカルマン。

「私も気になつて、ミミの組成構造を解析するようになりましたが、A.I.を扱ってきた者が蓄積してきた論理構造とは、根本的に違つてゐるといふことしか分からぬのが現状です。ただ、構造を解析する中で、ミミには、最初から膨大なデータベースが蓄積されているらしいことが分かつてきました。」

「例えば、多数の星系の地理的データとかでしょ?」とマリア。

「そう。でも、それ以外に何のデータベースがあるのかまだ未知の部分があります。ソフトウェアは、今ではミミが自分で開発できるようになつてるので、私が開発する必要がないのです。現時点では、生命探査、広範囲策敵、武装の補修、設計など戦艦に内蔵されているA.I.が持つていらない機能も備えていきます。」

「想像できないけど、いわば自立進化型のA.I.といふことなのね…」とソフィア。

「ええ、おっしゃるとおりです。しかも、処理速度の早さを実際に測定したことはありませんが、さきほどミミが乗つ取つた艦隊の再編成をご覧いただいとおりで、おそらくフォーツバニア少将を襲つた艦隊の運動速度を凌駕すると思います。もちろん数が違いますので単純比較はできませんが」

僕はそこで言葉を切る。

カルマンとソフィアは、黙つて考え込んでいた。

歴史の転回点を作り上げようとしているのだ。一筋縄ではいかないだろう、でも、ここが最初の勝負どころに違いない。

僕はマリアを見た。マリアは、一つうなずいて、私に任せなさいといつもの表情を浮かべた。僕はこのときほど、それを頼もしく思ったことはなかった。

幕間4 僕と世界の歴史（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

カルマンとソフィアは、沈黙を続けていた。

「私も実際に戦場に立ち会った。このまま今の方針で艦隊を強化しても、あと10年で宇宙海賊以上の実力を持つ敵に対抗できるとは思えないわ。外敵に対応するための戦略なんか全くないし、上層部は権力闘争しか考えてない者も多いし、士官には、出身星系間の派閥もあつていやこどがまだまだ絶えない。一般兵士の不満は爆発寸前で、また、いつ内部から反乱が起きててもおかしくない状況。こんな調子では、外敵と戦えるようになるまで1世紀かかるわ。100年かかるものを10年に縮めるとすれば、ショーンとミドリに力を発揮してもらうしか手段はないとは思うわ。でも、宇宙艦隊がこんな状態ではそれが困難だということも知ってる。だから、私が道を切り開く。パパが協力してくれなければそれでもいいわ。」

マリアが訴える。カルマンは目をつむつてじっと聞いていた。

おもむろに目を開けて、カルマンはマリアを見る。

「我が娘に苦労させたくはなかつたのだがな。どうやら私も布石を打つだけでは済まなくなりそうだな」

カルマンはそう言って、ソフィアを見た。

カルマンは、無難な事務屋と陰口をたたかれているが、カルマンの存在がなければ、宇宙艦隊は崩壊していたのではないかと言われるほどの功労者である。カルマンは、現宇宙艦隊総司令のエルネスト・リシュパンをはじめとする制服組幹部と同じく宇宙艦隊第三世

代と呼ばれる。

宇宙艦隊は、惑星連盟所属の常備軍となつた当初は、各地から宇宙空間で戦える艦と人材を寄せ集めただけの存在であり、形のみの軍隊だったと言われる。これを変えたのが、「ライオット・スターズ」と言われた執行部を率いたグリム・クラフトや、白兵戦において伝説的な戦功をあげ、一般兵の訓練法を築き上げた宇宙孤児の英雄ミハイル・アズマなど宇宙艦隊第一世代と呼ばれるカリスマたちである。伝説的なカリスマの華々しい活躍によって宇宙艦隊の地位は向上し、同時に現在の惑星連盟の体制を築くきっかけとなつた。

大規模反乱が減少すると、軍人は個人的な活躍の場を失う。そのようにして伝説的なカリスマの時代が過ぎ去ると、技術者の時代が訪れた。彼らは宇宙艦隊を軍組織として整えた。装備の標準化がおこなわれ、規則が明文化され、制度が設けられ、人材育成機関が設立された。彼ら技術者は宇宙艦隊第二世代と呼ばれた。

第一、第二世代によつて基礎が築かれた宇宙艦隊だつたが、その後、大規模派兵を経験することなく数十年が過ぎた。もちろん、小規模反乱の鎮圧、補給基地の建設、宇宙災害による救援活動、宇宙災害の予防、宇宙空間における治安維持活動など任務はひとつたりなしにあり、惑星連盟及びその傘下にある星系国家にとつて宇宙艦隊の存在意義は大きなものとなつていつた。その一方で、士官に目覚ましい活躍の機会は減り、執行部は官僚化が進んでいつた。官僚化に伴い、政界を巻き込んだ軍内部での権力闘争が激化し、士官の腐敗も進行していつた。士官と一般兵との反目、対立も目立つていく。この対立をさらに激化させた要因は、一般兵に占める宇宙孤児の多さだつた。アズマによって確立された一般兵訓練は、宇宙空間での戦闘や作業を重視するものだつた。それゆえ、惑星出身者が宇宙孤児に比べて訓練によつて脱落する率が高く、次第に宇宙孤児率が高

まつていったのである。

反乱の芽はあちらこちらで見られた。後方の安全な場所で命令を下し、自らは権力闘争に明け暮れ、私腹を肥やす惑星出身者の軍官僚。現場で危険な任務を担当する宇宙孤児。しかし、一般兵である彼らの待遇は改善されない。きっかけがあれば、暴発は必然だった。そんな時、彼らへの差別をあらわにする事件が起つた。

商船団や輸送船が恒星系間を行きかうようになると、小惑星帯などに半民半官の補給施設ができるようになつた。建設を担うのは宇宙艦隊の一般兵であつたが、補給基地の建設は、宇宙孤児が担う任務の中でも危険極まりないものと言われていた。当時、辺境に位置したミレイス宇宙域にも補給施設が建設される計画があつた。すでに計画段階で、この宇宙域には、隕石群の衝突が予想されていた。しかし、戦略的観点から、ここに補給基地を建設しておく必要があつたと言われている。宇宙孤児たちは、引っ越し無しに降り注ぐ小隕石を防ぎながら、建設に当たつた。今日作つたものが、次の日には隕石によつて破損しているような状況の中、当然予定されていた工期は延び延びになつていぐ。そこに、物資補給という名目で監察官がやってきた。監察官は、宇宙建築工学にも宇宙物理学にも心理学にも精通しておらず、最悪なことに惑星出身組の軍官僚だつた。監察官は、工兵の作業を視察して、先入観のままに宇宙孤児のサボタージュだと考えた。これ以上の遅れを許さないとの指示を残して、早々に去つた監察官は、現場に重大なことを伝え忘れていた。よりによつて接近中の小惑星隕石群の進路予想とその対応策だつた。この能力の低い軍官僚は、自らの失念が発覚することを恐れ、虚偽の報告をした。そして、その結果、多数の宇宙孤児が犠牲になつたのである。これまで惑星連盟は、この種の事件をもみ消してきた。しかし、IJの「ミレイスの悲劇」はもみ消すことができなかつた。アズマの曾孫が犠牲者の中に含まれていたからである。

宇宙孤児の反乱は必至だつた。あちこちで一般兵のサボタージュが行われ、上司が命令違反で拘束を命じても、逆に上司が拘束されそうになる事件が各地で起こつていた。あとは、どこかで反乱が起つれば、連鎖的に反乱が起き、宇宙艦隊そのものが崩壊しかねない状況にあつた。これを防いだのが、宇宙艦隊第三世代と後に呼ばれる改革派だつた。改革派の中でも、軍務省事務局付少佐だつたカルマンは、奇抜なアイデアで反乱の危機を乗り切つた。それは、世論を背景に90歳を超えたアズマを軍務省事務局長代理に迎え、軍改革の旗頭に据えたことである。電光石火のスピードだつた。この作戦の実現を、議会側から後押ししたのが、ヴァルター・フォーゲルト評議員。つまり、ソフィアの父だつた。

評議会内の軍事委員会ではヴァルターが、軍務省ではカルマンが、軍内部では派閥に属していなかつたエルネスト・リシュパンが中心となり、改革が進められた。宇宙孤児の待遇の改善、一般兵からの士官登用の拡大、贈収賄の徹底した取締まり、公益通報制度の創設など宇宙孤児の不満を抑制すると同時に軍官僚の勢力を削ぐ改革を矢継ぎ早に実施した。権力闘争に明け暮れていた海千山千の軍官僚が手も足も出ないほどのスピードだつた。アズマのカリスマ性を利かし、アズマ・ドクトリンに基づく改革と印象付け、世論を味方につけたことも多大な効果を發揮した。

カルマンは、反乱が起ることを予測し、ミレイスの悲劇が起つる以前から周到な根回しをしていたのである。

「これでも私とエルネストは軍の改革にある程度は成功したのだ。しかし、成功したとはいえ、お前が言つたとおりまだまだ最善の状

況にはなっていない。だから、内部に意識を向けすぎてきたことは否めない。我々が外宇宙に遠征に行くのが遠い未来の話であることを根拠として、外敵など来ないと高を括っていた。そこに、今回の宇宙海賊事件が起こった。外敵の可能性を考えはしたが、結局その可能性を排除したのだ。いずれにせよ、現段階で戦略の方向転換を迫られている。そこに、シヨーン君とマリア。そして、宇宙海賊：ではなかつた。宇宙に住まう者か、彼らを組み込んで考えよう。」
「そうね。まだ見ぬ敵とはいっても、私たちの故郷に侵略を許すわけにはいかないわね。私も議会でできることをするわ」

「…ありがとうございます」

マリアが深々と頭を下げた。

僕は、今後の戦略について、自分の考えをいくつかのポイントに絞つてカルマンに伝えた。いずれ、マリアを中心に軍内外敵対策の特務集団を作るにせよ、時間が必要だ。人材を見つけることも必要だし、他者が納得できる功績を上げることも必要だ。全てはそれからだ。もちろん、参謀総長にはできる限りのバックアップしてもらうが、自分で力が発揮できなければ、何も為し得ないにちがいない。

まずは、英雄を演じ切る必要があるらしい。これまでの生き方と決別できるだらうか、一抹の不安がよぎる。…ふと右手に温かいものが触れる。右手が強く握られた。横を見ると、邪気のない素直な笑顔のマリアがいる。

僕が向かうのは幸い孤独な戦いではない。そう思い直し、僕は右手を握り返した。

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございます。

A-1・宇宙刑務所『スペース・ジェイル』（前書き）

第一章は、幕間から1年半が経過した時点から開始します。その間の出来事は、話が進む中で埋まつていいくように進めていきます。

A-1 宇宙刑務所『スペース・ジェイル』

ショーン・ヒルガは、人生最大のピンチに陥っていた。

敵艦隊に囲まれたのでも、敵兵と対峙しているわけでもない。ましてや、ここは宇宙空間ではない。マリアがショーンの鈍感さについに切れて「あなたを殺して私も死ぬ！」と言つてナイフを突き付けられている場面でもない。

そう。ショーンは、軟禁されていた。

それだけなら、別にどうといつことではない。///を使って脱出するなどたやすい。

問題は、ありとあらゆる装着型端末を奪われていることだ。さすがに、こうされては///との交信は不可能である。しかも、ここはスペース・ジェイル 宇宙刑務所である。矯正不可能な犯罪者と政治犯を文字どおり島流しにする場所だ。

ショーンが矯正不可能な罪を犯したとか、政府転覆を計画したとかそういうことではなかった。罠にはまつたのだ。それはもう見事に。ショーンが、自分の人質としての価値を正確に認識していれば、このような状況は避けられたに違いない。人間の行動傾向はそう簡単に矯正できるものではない。特に、いざというときに、その人の癖というものは現れるものである。

ショーンは、それを今痛感していた。後悔してもどうしようもないことは分かっていても、人間、軟禁されれば来し方を振り返るものだ。そこに無念さがあれば、どうしても後悔してしまう。

ドアがノックされた。

（食事かな？早くないか？）

ショーンは不思議に思つたが、この部屋には時計もないのと、時間的感覚さえ分からなくなつてゐるのかもしれない。

「『機嫌いかがかな？宇宙孤児の英雄殿』

顔を出したのは、卵型の顔にニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべるガリガリに痩せた男だった。

「よくはないですね。ただ、何もない部屋に閉じ込められていると、人間どんなことを考へるのかを実験できてうれしいですけどね。そういうあなたは『機嫌いかがですか？ミッシェル・オリオールさん』男は、左の口許を釣り上げて笑う。笑い声も不快な男だ。

「ヒツヒツヒ、英雄殿が俺なんかの名前を覚えてくれていて嬉しいね」

オリオールは、V・C^{ガーレンシア継元}・開始以降、史上最悪のテロリストだ。彼のテロによつて命を落とした者は億を数えるのではないかと言われる。星系外追放処分になつた彼は、この宇宙刑務所に収容されていた。

「稀代の大量殺人兵器が私なんかに何の用でしよう？」

「ヒツヒツヒ、リーダーがあんたを呼んでる。英雄に仕事を与えなければいけないんだとさ」

「おとなしく人質になつてゐるだけではダメなんですかね？」

「フハハハ！ヒツヒツヒ。そりやあダメだ。あんたを呼んでこなきや俺が殺される」

「それは良い！と私が思つて抵抗したら、どうなるんです？」

オリオールは、笑いをやめてイカれた目をショーンに向けた。

「ここに管理人どもに、一人ひとり違うやり方で死んでもらう」とになるさ」

「それはまずいですね・・・分かりました。案内願いましょう」

ショーンは、オリオールと話しながら打開策を考えていたが、取りあえずリーダーに会うことが先決だと考えた。情報を得なければ、対応策も考えられない。オリオールを殴つて逃げる」ことはできるが、それではこの件は片付かないだろう。いずれにせよ、現時点では手持ちのカードが少なすぎた。

ショーンは、オリオールについて部屋を出た。この部屋に入つてから1日半が経過していた。

A-1・宇宙刑務所『スペース・ジェイル』（後書き）

拙いお話を読んでいただきまして、ありがとうございます。

B・1・戦乙女の迷い

マリアは、迷っていた。

これまでの人生で、こんなに迷ったことはないといつぶらつに。

ショーンが、惑星出身者との恋愛・結婚について、子を為して、その子を不運な目にあわせることへの抵抗感を語ったときでさえ、このような動搖はしなかつた。もちろん、そのときも金槌で頭を殴られたような相当なショックを受けたが、ショーンへの思いに迷いは生じなかつた。むしろ、この困難をどう乗り越えてくれようかと密かに闘志を燃やすこととなつた。ショーンはもちろん、そんなことに気づかなかつただろうが。

マリアは戦場に向かつていた。元部下の反乱を鎮圧する役目を担つて。

マリアは少尉に任官後、半年の研修を経て、辺境と呼ばれるマジエッタ星系に赴任していた。

惑星連盟で辺境というのは、植民の最前線の意味である。マジエッタ星系には、恒星マジエッタの第2、第3惑星がハビタブルゾーンにあり、それぞれ居住惑星化がなされ、植民が進んでいた。植民は一大事業である。近隣星系が国家を上げて植民惑星の開発に臨む。開発に成功すれば、経済効果の大きさは莫大なのだ。当然、金が絡めば問題も起きる。武力衝突から脱法行為まで様々な困難や悪事がそこには介入する余地がある。

惑星上での問題は、その当事者が所属する星系国家の管轄であり、惑星上で異なる星系出身者同士の武力衝突が起きた場合には、まずは星系国家間の外交問題となる。しかし、一步宇宙空間に出れば、違法行為の取締まりはマリアが所属するマジックタ方面分艦隊の管轄だった。

マリアが、与えられた仕事は広範で、軍隊と宇宙警備と警察と税関を足して1で割ったような仕事である。つまり、最前線で起こるすべてのことに対応するのが仕事なのだ。マリアのもとには、200人の一般兵が配属されていた。この200名で、第一惑星メルビルの開発に伴う宇宙空間での問題に対処している。

マリアは、ここに赴任する際、一抹の不安があった。それは、自分のやり方が部下に通じるかとの不安である。通常、少尉は任官後数年後には、別の任地に転任する。その間、問題がなければ転任に伴い、中尉に昇格する。ましてや、部下は、宇宙孤児が大半を占め、宇宙空間での技術はヒヨコ少尉にかなうはずはない。だから、最初の赴任地では、問題を穩便に収め、無難にやるというのが職業軍人の処世術だった。

当然、マリアには無難に過ごうとの考えは毛頭なかつた。マリアにとって、仕事は全力を打ち込むものであり、少尉だからとか、辺境だからとか、そんな言い訳を自らに許すことはありえなかつた。マリアの不安は、普通の少尉とは考えが違うことを認識しており、そのうえで意味ある成果を残さねばならないとのプレッシャーゆえに、起こるものでもあつた。

結果的にいえば、マリアの不安は杞憂に終わった。マリアの事務処理能力、折衝能力の高さを背景に、部下に大きな権限を与え、

「マリアは要望や問題について積極的解決に徹したのである。

マリアは着任直後、補佐の軍曹たちを集めて最初の指示を出した。

「私は経験も足りないし、現場においてあなたがたが持つていてるほどの能力もない。実務はすべてあなた方に任せる。しかし、私は印鑑をつくだけの軍人ではない。事務処理と折衝が私の仕事だ。だから、あなた方に要望があればどんなに小さなことでも上げてほしい。問題案件についても相談してほしい。」

指示は簡潔だった。これが補佐の軍曹たちに好印象だった。これまでの腰かけの少尉は、上との折衝を避けたいがために、要望をもみ消すような輩が多かつたのである。そして、実際に、仕事が回り始めると、マリアの能力の高さが遺憾なく發揮されていった。要望は次々と実現され、発想の転換による工夫も多岐にわたった。加えて、マリア自ら、一般兵のもとに動き、話し、不満を聞くということまで日常的にやってのけた。着任3カ月で、部下の士気が異なってきた。宇宙孤児の英雄であるショーン・ヒルガが、マリアの長所ををインタビューで美辞麗句に包んで上げ連ねたことも影響したのかもしれない。名実ともに「マリアの中隊」と呼べる状態になつていた。

そんな折、ある問題案件が持ち上がったのである。

B-1・戦ノ女の迷い（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございました。

A - 2・謎が全く解けない

ショーンは考えていた。

彼ら特別犯罪者が、なぜ集団を作ることができているのかを。

宇宙刑務所は、コンセプトが明確である。それは社会との完全なる隔絶、その一点である。

外宇宙への移住を人類が決めた時、当然、犯罪をどう扱うかが大きな問題となつた。地球世代において脳電磁科学と行動科学の発展により、矯正不可能な犯罪者の範囲はすいぶんと狭められ、自由刑（いわゆる自由を制限する刑罰）よりも人格刑（矯正プログラムによって人格を変化、あるいは制限する刑罰）への移行が既になされていたという。

特に、外宇宙への移住に際しては、罪を犯したからと言つて死をもつて購うことは、限られた人的資源という観点から不経済であると考えられた。ゆえに、「徹底した矯正」に重きを置かれることがなつた。もちろん、犯罪の原因を除去したからと言つて、被害感情がなくなるわけではない。特に個人に対する罪は、応報感情が極めて強い。それでも、惑星移住に成功した後でも人格刑が支持されているのは、同一人による再犯がほとんどになるという予防効果と、プログラムの強度によっては人間らしさ自体を失つてしまうという副作用による補償効果がある故だろう。もちろん、矯正プログラム自体が非人道的であるという議論は未だに存在するが。

そのような人格破壊に近い矯正プログラムによつても、矯正不可能な犯罪者がごく稀に存在する。彼らに対して、死刑しかないという議論は今もある。しかし、それが議論されるたびに、誰が執行するのかという問題が持ち上がる。一度死神の鎌を手放してしまつた人類がそれを再び手にするのは、思ったよりも抵抗感が強かつたのだ。経済的側面から考えれば、執行する側のリスクとその補償という問題があり、執行を機械によつて自動化する方法も考えられたが、人間としての最低限の尊厳に抵触することにも抵抗感が強かつた。そして、妥協案として考えられたのが究極の自由刑としての追放だった。

当時の惑星連盟の刑事政策委員がこんな台詞を残している。

「積極的に殺すのはご免だが、彼らが死ぬのは勝手だ」

こうして宇宙刑務所という小さな惑星くらいある巨大な人工構造物が、統計上、この先100年間は、1万人を越えることがないと予測される極少数の犯罪者のために用意された。現在の収容人員は937人である。手術によつて上腕部と鎖骨下に埋め込まれたチップにより居場所が常に管理され、「居所」にあるセンサーによつても管理されている。

彼らは、人工構造物上に、それぞれの居所が与えられる。居所では、最低限の衣食住が完備されている。ボタン一つで注文の品が届く。至れり尽くせりである。しかし、彼らが一定期間居所を離れば、再度居所に戻つてももう要求は聞き届けられない。他人の居所で要求しても同じである。また、自分の居所に他者を入れても、要求は聞き届けられない。

構造物の広さ、制御室による監視により、犯罪者同士が出会うこ

とは計算上不可能であり、よしんば出会いうことができたとしても、後は仲良く死を待つのみだ。つまり、惑星社会からだけでなく、あらゆる社会的関係から隔絶されることが意図されているのだ。

（しかし、彼らはこのシステムを搖い潜つて、現に社会集団を形成しているらしい。この謎を解かない限りは、根本的な解決にならないだろう）

ショーンはそんな予測を立てた。

宇宙刑務所を制御する機能は、惑星で言えば核にあたる部分にある。ここに管理者として、特別刑務官が100人余り配属されている。通常の犯罪であれば、刑罰の執行は各星系国家に任せられている。ただ、この宇宙刑務所のみが宇宙連盟の所管であり、各星系国家から持ち回りで3年の任期で刑務官を派遣させている。

オリオールについて、地下を下りていく。迷宮のように作られているのは、侵入者対策だろう。

「リーダーってのは、どんな人なのでしょう？」

ショーンはオリオールと話したくなどなかつたが、情報収集のために口を開く。

「へツへ、偉大なお人さ」

「あんたみたいな殺人兵器を従えているんだから、そうなのかもしれませんね」

「ヒツヒツヒ、そのとおりさ。さすがは英雄様だな、我らのリーダーは、俺たちを地獄の淵から救つてくださつたんだ。人殺しに狂つた俺でさえ、ここでは自殺するかしないか、毎日考えてたんだ。そ

んなとき、我らがリーダーは颯爽と現れてくださつた

「…なるほど。力で従えられていくわけではないようですね」

「フハツ、いや、俺なんか何で勝負しても絶対に勝てねえって思つてるよ」

「はあ、そうですか。すごい人なんですねえ」

オリオールは笑いが止まらくなつた様子だつた。ショーンは、ますますわけが分からなくなつた。オリオールが狂つてていることは間違いない。ただ、人間的に狂つてているにしても、論理が危うい奴という印象はなかつたのだが。

ヒッヒッヒ、と妙なひき笑いをしながらオリオールは迷う様子もなく、最下層を目指していつた。やがて、大きなピロティに出た。

「まつすぐ行つた部屋が、リーダーがいらっしゃる部屋だ」

「わかりました。オリオールさんは？」

「俺はここからは、案内できねえんだ。あとはあんた一人で行つてくれ」

「はあ、分かりました。案内ありがとうございました」

「フハハハハ！あんた、ハハ、良いな。フハハハハ！」

オリオールは大笑いしながら、来た道を戻つて行つた。

どうやら、この先は中央制御室らしい。制御室に彼らのリーダーがいるということは、やはり、宇宙刑務所の機能は犯罪者に乗つ取られているということだろう。

ショーンは覚悟を決め、中央制御室の扉を開いた。

A - 2・謎が全く解けない（後書き）

拙いお話を聴んでいただき、ありがとうございました。

「少尉、失礼します」

中肉中背の男性が、マリアの執務室に現れた。顔の深い皺や髪を覆う雪を見れば、もう初老と言つても良い年代である。しかし、実年齢はまだ40代である。

「い」苦労さま、トレーンス上級軍曹」

マリアは立ちあがつて敬礼を返し、中隊N-02であるアーマンド・トレーンスを迎えた。

「実は、ご相談申し上げたいことがござります」

トレーンスはゆつくりした口調で述べる。それがまた「おじいちゃんっぽさ」を助長しているのだろう。本人は、新兵が「おじいちゃん」と陰で読んでいても気にしていない様子である。

「じゃあ、そこに掛けてくれる?」

マリアは応接セットへと促す。

「歴代の隊長には報告を申し上げていたのですが、メディット星系所属の大型輸送船のことです」

「ええ。知つているわ。ずいぶん前に薬事条約違反容疑で臨検した輸送船ね。条約違反はあつたけど、大したお咎めはなかつた件よね?」

トレーンスは細い目を見開いた。見開いても皺が邪魔をしてそれほど大きくならなかつたが。

「…はい。禁止薬物は見つかりましたが、使用禁止になつた排卵抑制剤を積んだままにしていたということで、メディットでの裁判で船長とその輸送船の所属会社に罰金命令が出ただけでした」宇宙で子を為さないようにしていた歴史の名残。そのように処理されたのだ。

「ええ。それで?」

「我々は、あのとき渋る当時の隊長を説得しました。あの輸送船は、人身売買に利用されているのではないかと疑っていたからです」「しかし、少なくともその証拠は見つからず、挙げられたのは禁止薬物の積載だけだったというわけね」

「はい。しかし、あの船は、いわゆる・・・」

トレンスは言い淀む。

「いわゆる『風俗船』と言いたいんでしょう？」

「・・・はい」

「しかも、宇宙孤児の女性に風俗業務をさせ、子を為させ、生まれた子を奴隸として取引する違法商売をしている疑いが高い。違うかしら？」

「…おっしゃる通りです。しかし、どうして少尉がそこまで」

「ちゃんと仕事してれば分かるわよ、それくらい。部下が疑惑の目で見ている案件だもの」

マリアは微笑んだ後、トレンスを見据えて言つ。

「でも、実際に証拠をつかむのは困難よ。おれらハメティット政府の高官が関わっているんじやないかしら」

「・・・それでも、見逃すわけにはいきません！」

トレンスは、珍しく語氣を強めた。

「もちろんそのつもりよ。それで、何か妙案はあるのかしら？」

「それは…残念ながら。それで、こうしてお知恵をいただきに参ったわけです」

マリアは立ち上がり、席に戻り、コンソールを操作する。

「これは？」

「よく見なさい。」

仮想ディスプレイに映っているのは、ID情報の羅列である。

「一つを見比べてみて、違和感はない？」

「あの船の乗船名簿ですね…違和感…」

トレンスは、つぶやく。

「あー船員名簿に

「…気づいたかしら？」

マリアが操作すると、船員名簿のある部分が拡大される。

「女性船員のうち二人、男性船員のうち一人に違和感があるわ。3年前と現在で、HIDナンバーも名前も出身地も同じなのに年齢に変化がない船員がいる」

「確かに。しかし…」

「ええ、記載間違いはよくあること。でも、薬事条約違反の前例があるから、臨検検査は可能よ」

「少尉…ありがとうございます」

トレンスは立ちあがって深々と頭を下げる。

「頭を上げて頂戴、トレンス上級軍曹。まだ仕事は何も始まってないわ。周到な準備をお願いするわね」

トレンスは、去り際に敬礼をする。上級軍曹になつて心底から敬意を込めた敬礼をするのは、初めてだつたかもしない。見た目は孫のよつな世代であるが、そんなことは全く気にならなかつた。

この日、マリア中隊の一般兵の噂の中に、「スキップする上級軍曹」という怪談が増えた。

B - 2 . おじこやかと軍曹の案件 (後編)

拙こね話を聴んでいただき、あつがといづれこまや。

「よつじや、英雄殿」

ショーンが入室するや、機械の声が響く。正面のモニターには「SOUND ONLY」の文字。リーダーを確かめよつと意気揚々と入室したショーンは肩透かしを食らつた形になる。

「せんに驚くことかね？正体をなかなか現さないのは、悪役にたくさんいるだろ？」「まるで根っからの悪ではなく、悪役を演じているかのよつな口ぶりですね」

ショーンは、この正体不明の敵に騙されたのは2度目であり、すぐがに皮肉も言いたくなる。

「まさにそのとおり。不本意ながら、悪役を演じているのだよ」皮肉で言つたことが本気で受け止められ、ショーンは一層不愉快な気持ちになつた。

ショーンの今回の受難は、ショーンが配属されたメディット方面分艦隊に、宇宙刑務所から支援要請が入つたことから始まる。

メディット星系は、惑星連盟の外縁部に位置し、辺境宙域の開発の中心国家であり、植民地を利用した経済新興国となりつつあつた。メディット星系と辺境宙域の中間に、惑星連盟と民間企業による半官半民の補給基地ができ、新たに編成された駐留艦隊の下士面としてショーンは配属された。

メティット星系は完全武装の宇宙警備隊も擁しており、治安は良好である。したがつて、駐留艦隊と言つてもその規模は小さく、通常の分艦隊の半分程度であり、艦隊司令も大佐が当てられている。ただ、艦隊司令と言つても実戦経験はない。というのも、もともとは補給基地を運営する惑星連盟の官僚であり、駐留艦隊が新たに編成される際に、艦隊も運用する必要が生じ、大佐扱いで軍に所属する形になつただけなのである。その他の士官の大半も同じように官僚出身の腰かけ軍人だつた。

配属されたショーンの仕事はとにかく雑用だつた。艦隊を軍隊として成り立たせるためのありとあらゆる雑用を押しつけられた。着任あいさつでの艦隊司令の言葉は、今でも覚えている。

「君の上司に当たるイワン・バルだ。申し訳ないんだが、私は大佐待遇だが軍のことはからつきしだ。他の者も補給基地の運営の仕事がある。艦隊専属の士官は君だけだ、よろしく頼んだよ」

「よろしく頼んだ」だけで、5,000人以上の命をあずかることになるのだから、命令というのは恐ろしい。ただでさえ新たに編成された艦隊というのは、指揮系統が乱れがちで、動きが鈍く、士気も低い。そんな彼らに艦隊訓練を実施し、弱点を補強し、士気を高める必要がある。普通に考えれば、新米少尉には荷が重すぎる。ショーンも、ミミがいなければ与えられた仕事の10分の1もこなせなかつたに違ひない。

ショーンの自己評価を気にしない癖は、ここでは長所に働いた。ショーンは、配属時点すでに有名人だつた。個人情報は駄々漏れで、出自はおろか、ショーン自身が気づいていない歩き方の癖まで皆が知つていた。英雄と言うよりは、アイドルに近かつたのかもしれない。ショーンは、別に軽薄な人間ではないのだが、マスクミ

に消費されるところ「」とほそのような印象を「」えるところ「」である。

着任後、補佐の上級軍曹たちを集めてブリーフィングを開く」とにした。軍歴の長い上級軍曹たちは、この機会に「アイドルの小僧」をこきおろしてやろうと手ぐすねを引いて待っていた。しかし、それは見事に裏切られることになった。

ブリーフィングの10分前、5人の上級軍曹たちは会議室に向かつた。「アイドルの小僧」を待ちかまえてやるつもりで。会議室に入ると、そこにはすでにショーンが隙のない敬礼をして待っていた。

「初めまして、歴戦の勇者のみなさん…ショーン・ヒルガと申します…」このたび、少尉として任官しました。どうぞよろしくお願ひいたします！」

軍曹たちは、声の大きさに圧倒され、とつさに敬礼を返せたのは2、3人だけだった。ショーンはそれを気にするそぶりもなく、皆に席を勧めた。

「では、ブリーフィングを始めます」

「少尉、すみません。我々の自己紹介がまだ」「皆さんは、相互にお名前と所属はご存知ですか？」

「ええ」

「なら、自己紹介の必要はありません」

「でも…」

「ご不満ですか？キース・エヴァーツ上級軍曹。経歴も披露しますか？」

「いえ、結構です。了解いたしました」

「ご不快に思われたら、謝罪します。とにかく、儀礼的な時間がも

つたいたいと思いますので」

ショーンが軍曹たちを見回すと、展開の速さに驚いている様子だが、少なくとも不満顔はいなかつた。

「では、今私どもの艦隊が置かれている現状からお話ししましょう。」

ショーンは、手早く艦隊の現状について説明した。すると、上級軍曹の中では若手のショザーリ・ケンジットが手を上げた。

「少尉殿が張り切るのは分かりますが、この艦隊で軍曹集めてそんな話しても無駄ではないでしょつか？」

「なるほど…無駄と考える根拠は何でしょつか？ショザーリ・ケンジット上級軍曹」

「そりやあ、疲れるじゃないですか。なあ」

ケンジットは他の仲間を見て言つ。周りは興味深そうに見るが、明確な賛同者はいなかつた。

「じゃあ、ケンジット上級軍曹。ここには、5・000人の兵がいる。誰がその命を預かるんです？」

「…それは、上官でしきう」

「そう、上官です。じゃあ、この艦隊の司令は誰で、どんな経歴の持ち主かは知っていますか？」

「もちろん、知っていますよ。官僚で、しかも建設省かなんかの出身でした。従軍経験は全くない」

「私の言いたいことが今の質問と答えから分かりませんか？」

ショーンは語氣を少し強めて言つ。

「…・・・

ケンジットは口をそらして押し黙る。

「ケンジット上級軍曹なら、命を預かる重みが分かるはずと思いますが？」

「…失礼しました」

「Jの会議がこの艦隊の最高意思決定機関だと思つてください。皆さんしか、民を守り、兵を守ることができないのです」

ショーンが上級軍曹たちを見据えると、彼らは先ほどよりも真剣な目を向ける。

「話を続けましょ。要するに我が艦隊は、寄せ集めのボロボロの軍隊です。それを3ヶ月で実戦に耐えうる軍隊に仕上げねばなりません」

「3ヶ月ですか?!」

「ええ。3ヶ月です。納得いきませんか? レナ・バード上級軍曹」「いえ、納得の問題ではありません。必要性と実現性の問題です」「いい答えです、バード上級軍曹。まず必要性から行きましょう。この海域では、いつ戦闘が起こつてもいい状況にあるからです。」「そんなはずはありません」

「あなたがそう考える根拠は何ですか? キット・ロウズ上級軍曹」「それは…これまで全くそんな兆候はありませんでした」

「確かにこれまで戦闘とは無縁の海域でした。では、なぜここに駐留艦隊を置く必要が生じたのか? その点はどう考えますか?」「補給基地の確保のためではないでしょうか?」

「そのとおりです。では、補給基地が確保できない状況に誰がするんです?」「…」

ロウズは考え込んだ。

「仮想敵が存在するということですか?」

最後まで黙つていたジリー・ミルトンが質問する。

「そうです。この海域で、我々に勝る武力を持つているところがあるでしょ?」

「メティットですね」

「そのとおりです、ミルトン上級軍曹。今の執行部は、戦略的に意味のない艦隊は置かないはずです。宇宙海賊に対処する必要もあるわけですから。仮想敵が本当の敵にならないためにも、早急に連度

を高める必要があるわけです。」「まあよろしくですか？」

上級軍曹たちは、それぞれ頷いた。

「では、実現性の問題です。これを見てください」

ショーンがコンソールを操作すると、ディスプレイに訓練スケジュールが表示された。

「おそらく過酷なスケジュールになるはずです。歴戦の勇者であるあなた方なら、可能と思います。力を貸していただけますか？」

ショーンは、マスク対応で覚えた、優しい笑顔を上級軍曹たちに向けた。上級軍曹たちは、その笑顔をスマートフォンを通して見ていたが、一連のやり取りを終えた後では、その意味が変わっていた。

最も年長者であるエヴァーツは、会議室を出た後こう漏らした。

「震え上がったぞ。あの小僧には

会議室に入る前とは小僧の意味合いが変わっていたことは言つまでもない。

A-3・偶像の小僧（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1873z/>

宇宙孤児の秘密

2011年12月29日20時54分発行